### 史跡松前氏城跡 福山城跡 館城跡

# 館城跡VI

-平成21年度町内遺跡発掘調査事業に伴う発掘調査報告書-

平成22年3月

北海道厚沢部町教育委員会

# 序文

北海道南西部に位置する厚沢部町は、人口5千人に満たない小さな町ではありますが、川と森に囲まれた自然豊かな町であります。まちの8割以上を森林が占め、ヒノキアスナロやゴヨウマツの北限であり、トドマツの南限でもあります。多様な樹種で構成される森林は、多様な野生生物を育み、厚沢部町独特の豊かな自然景観を創りあげました。私たちの先人も、厚沢部の豊かな森とともに暮らし、その伝統や文化を築き上げてきました。このたび発掘調査を実施いたしました館城跡も、そのような町の貴重な文化財の一つであります。

館城跡は、明治元年、松前藩によって蝦夷地経営の新たな拠点として築かれましたが、築城開始からわずか2ヶ月半という短期間で、旧幕府軍の攻撃を受け落城し、その後、再建されることなく現在に至っております。今では、わずかに土塁や堀、礎石、井戸跡が、当時の面影をとどめるのみとなっています。

現在の館城跡は、「館城跡公園」として町民に親しまれており、毎年5月上旬には「館城跡まつり」が開催され、多くの町民が心待ちにする恒例の行事となっています。また、幕末から維新期にかけての北海道の大きな変革期を象徴する遺跡として、学術的にも高く評価されております。

昭和41年に北海道の指定史跡となり、さらに平成14年に国の史跡に指定されました。

平成17年から史跡の概要を把握するために発掘調査を継続して実施しており、また、平成18年度には保存管理計画を策定し、史跡の保存管理に努めているところであります。

今後は、館城跡のより積極的な公開・活用を図っていくために、本格的な保存整備事業を実施する 予定です。

今年度の発掘調査では、館城跡北西部の堀・柵列の所在を確認するために、史跡外を含めた範囲内容確認調査を行いました。また、平成20年度に引き続き、館城跡北東部に位置する「伝米倉跡」周辺の調査を行い、館城跡北東部の外郭線の所在を明らかにすることができました。さらに、地表面における礎石配置確認・測量調査を行い、当初の予想を上回る247基の礎石を検出し、これらの建物の一棟が文献記録と極めてよく一致することが確認されました。これらの成果が館城跡の保存整備に活用されるのみならず、調査研究における基礎資料となることを期待いたします。

最後になりますが、本事業の実施に際しまして、文化庁、北海道教育委員会をはじめとする諸機関・ 各氏から、多くのご指導・ご助言をいただきましたことを深く感謝申し上げます。

平成22年3月

厚沢部町教育委員会 教育長 中 井 文 夫

## 例言

- 1. 本書は、厚沢部町が国庫補助(埋蔵文化財緊急調査費)を受けて、平成21年度に実施した「町内遺跡発掘調査等」事業における埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
- 2. 遺跡の地番は北海道檜山郡厚沢部町字城丘158ほかである。
- 3. 本書の編集は石井淳平(厚沢部町教育委員会事務局社会教育係主事・学芸員)が担当した。
- 4. 文責者は、特に記した者以外は石井淳平である。
- 5. 現場及び遺物の写真撮影は石井淳平が担当した。
- 6. 陶磁器の鑑定は、石井淳平が行った。
- 7. 陶磁器の実測・トレース及び遺構図面等のトレースは安達優子が行った。
- 8. 細部地形レーザー計測及び礎石のトータルステーション計測・図化は株式会社シン技術コンサル に委託した。
- 9. 火山灰同定及び花粉分析はパレオ・ラボ株式会社に委託した。
- 10. 出土資料は厚沢部町教育委員会が保管する。
- 11. 調査にあたっては、「館城跡調査検討委員会」を組織し、指導を受けながら調査を実施した。

委 員 長 藤沼邦彦 (元弘前大学人文学部教授)

副 委 員 長 後藤元一(後藤環境デザイン研究室)

委 員 久保 泰(松前城郷土資料館館長)

佐藤永吉 (館観光促進会会長)

千田嘉博(奈良大学文学部教授)

指導·助言 佐藤正知(文化庁文化財部記念物課)

田才雅彦(北海道教育庁文化・スポーツ課文化財調査グループ)

12. 調査にあたっては、下記の方々及び機関のご協力、ご助言をいただいた。

伊勢谷久夫、内田和伸(文化庁文化財部記念物課)、大萱昭芳、大橋康二(佐賀県立九州陶磁文化館)、小泉雅弘(駒沢大学文学部)、笹森泰子、佐藤雄生・前田正憲(松前町教育委員会)、関根達人(弘前大学人文学部)、高田徹、竹原伸二(枚方市教育委員会)、只野みさほ、只野久美子、塚田直哉(上ノ国町教育委員会)、中井均、中野雄二(波佐見町教育委員会)、野上健紀(有田町歴史民俗資料館)、藤森静子、山崎香、渡辺愛子

# 記号等の説明

- 1. 実測図等の縮尺は原則として以下の通りとし、全てスケールを付して図中に標示する。 遺構図 40分の1、陶磁器・金属製品 3分の1
- 2. 実測図中の方位は真北を示す。
- 3. 土層等の色調、含有物の混在状況(面積比率)については、『新版 標準土色帖』(1996年版) に基づき表記した。

# 目次

序文 例言 記号等の説明

<本文	目	次	>
-----	---	---	---

Ⅰ章 調査の概要	1	(1) 調査区の概要	17
1. 調查要項	1	(2) メイン調査区	17
2. 調査体制	1	(3) サブトレンチ1	17
3. 調査に至る経緯	1	(4) サブトレンチ2	17
4. 調査結果の概要	3	(5) サブトレンチ3	17
5. 調査の経過	3	(6) サブトレンチ4	18
(1) 調査準備等	3	(7) サブトレンチ5	18
(2) 現地調査	3	(8) サブトレンチ6	18
(3) 整理作業	4	2. 第2調査区	26
Ⅱ章 遺跡の位置と環境	7	(1) 調査区の概要	26
1. 地理的環境	7	(2) 2-1調査区	26
(1) 位置と地形	7	(3) 2-2調査区	26
(2) 地質	7	3. 第3調査区	31
(3) 館城跡関連遺跡	7	(1) 調査区の概要	31
2. 館城築城とその経緯	8	(2)「溝状遺構」	31
(1) 13代藩主崇広の死去と徳広の藩主就任	8	(3) 整地層	31
(2) 正義隊のクーデター	8	(4) 「沢状地形」	31
(3) 館城の築城	8	4. 第4調査区	38
Ⅲ章 調査の方法	13	(1) 調査区の概要	38
1. 発掘調査基線	13	(2) 平成20年度西側調査区	38
2. 調査の方法	13	(3) 平成20・21年度柵列	38
(1) 掘削	13	5. 第5調査区	45
(2) 現地測量	14	(1) 調査区の概要	45
(3) 細部地形レーザー計測	14	(2) 礎石建物の概要	45
(4) 礎石トータルステーション計測	14	(3)「米倉建物」	45
(5) 写真記録	14	(4)「本丸建物1」	45
(6) 1次整理	14	(5)「本丸建物2」	45
(7) 2次整理	14	(6)『増田家文書』「館築城圖」との比較 …	46
(8) 保管	15	6. 遺構出土遺物及び包含層出土遺物	52
3. 基本層序	15	(1) 第4調查区平成20年度出土遺物	52
Ⅳ章 遺構と出土遺物	17	(2) 第2調查区出土遺物	52
1. 第1調査区	17	(3) 第3調査区出土遺物	52

(4)	第4調查区平成21年度出土遺物	52	2. ‡	L辺の堀・柵列の所在	67
(5)	第5調查区「米倉建物」採集遺物 …	52	3. ‡	と東部の柵列・整地層	68
(6)	第5調查区「本丸建物」採集遺物 …	52	4. F	南西部の堀・土塁・柵列	68
V章	自然科学的分析	59	5. 依	楚石建物跡	68
1. )	厚沢部町館城跡のテフラ分析	59	(1)	「米倉建物」	68
2. )	厚沢部町館城跡の花粉分析	62	(2)	「本丸建物」	69
VI章	調査のまとめ	67	参考》	文献	70
1. !	史跡外西側の堀・柵列	67			
<挿[	図目次>				
I章			図20	平成20・21年度第3調査区3次元現法	兄
図 1	館城跡遺構・調査区配置図	6		地形図	35
Ⅱ章			図21	平成21年度第3調査区3次元現況	
図 2	厚沢部町の位置と館城跡関連遺跡…	10		地形図(北西から)	36
図 3	館城跡の位置と周辺の地形	11	図22	平成21年度第3調査区3次元現況	
図 4	指定地周辺の地形と指定範囲	12		地形図(南東から)	36
Ⅲ章			図23	第3調査区沢状地形エレベーション図	凶
図 5	グリッドの呼称方法	13		及び溝状遺構・整地層断面	37
図 6	基本層序模式図	15	図24	第4調査区全体遺構配置図	39
IV章			図25	第4調查区平成20年度西側調查区平面図	40
図 7	第1調査区遺構配置図	19	図26	第4調査区柵列平面図(1)	41
図8	第1調査区サブトレンチ1	20	図27	第4調査区柵列平面図(2)	42
図 9	第1調査区サブトレンチ2	21	図28	第4調查区柵列平面図(3)	43
図10	第1調査区サブトレンチ3	22	図29	第4調査区柵列平面図(4)	44
図11	第1調査区サブトレンチ4	23	図30	第5調查区礎石建物配置全体図	47
図12	第1調査区サブトレンチ5	24	図31	第5調査区「米倉建物」平面図	48
図13	第1調査区サブトレンチ6	25	図32	第5調査区「本丸建物1」平面図…	49
図14	2-1 調査区遺構配置図	27	図33	第5調査区「本丸建物2」平面図…	50
図15	2-1調査区西壁断面図	28	図34	第5調查区礎石建物『増田家文書』	
図16	2-2調査区遺構配置図	29		「館築城圖」との比較	51
図17	2-2調査区西壁断面図	30	図35	第1調查区~第4調查区出土遺物…	53
図18	第3調査区全体遺構配置図	33	図36	第5調査区「米倉建物」採集遺物…	54
図19	第3調査区遺構配置図	34	図37	第5調査区「本丸建物」採集遺物…	55
<表	目次>				
表1	館城跡発掘調査の経過	2	表4	掲載遺物一覧(陶磁器)	56
表 2	平成21年度調査の概要	3	表 5	掲載遺物一覧(金属製品)	57
表3	平成21年度館城跡発掘調査基準杭と座標	13	表6	平成21年度出土遺物集計表	58

#### <写真図版目次>

写真図版 1	[	75	写真図版1	1 85
写真1	『増田家文書』「館築城圖」		写真16	平成21年度第4調査区堀・土塁・柵
写真図版 2	<u>)</u>	76		列屈曲部(東から)
写真 2	第1調査区全景(南から)		写真17	平成20年度第4調查区柵列柱痕断面
写真3	第1調査区サブトレンチ1堀断菌	ī		(南から)
写真図版 3	}	77	写真18	平成21年度第4調查区柵列断面
写真4	第1調査区サブトレンチ5(南西か	ら)		(南東から)
写真 5	第1調査区サブトレンチ5堀断菌	ī	写真図版12	2 86
	旧用水路検出(南から)		写真19	第5調查区「米倉建物」礎石検出状
写真図版 4	<u> </u>	78		況(南から)
写真 6	2-1調査区全景(東から)		写真20	第5調查区「本丸建物2」礎石検出
写真7	2-1調査区全景(西から)			状況(南東から)
写真図版 5	-)	79	写真図版1	3 87
写真8	2-2調査区全景(南東から)		写真21	第5調查区「本丸建物1」礎石検出
写真9	2-2調査区西壁断面(南東から)			状況(南から)
写真図版 (	······	80	写真図版14	4 88
写真10	第3調査区全景(南から)		写真22	平成20年度第4調査区出土遺物
写真11	第3調査区「沢状地形」(東から)		写真23	平成21年度第4調査区出土遺物
写真図版 7	7	81	写真24	第3調查区、第4調查区出土金属製品
写真12	第3調査区溝状遺構断面(東から	)	写真図版1	5
写真図版 8	}	82	写真25	第5調查区「米倉建物」採集遺物
写真13	平成20年度第4調査区堀・土塁	•	写真図版16	690
	水路(西から)		写真26	第5調查区「本丸建物」採集遺物
写真図版 9	)	83		
写真14	平成21年度第4調査区全景(北か	ら)		
写真図版1	0	84		
写真15	平成21年度第4調査区南側柵列			
	検出状況(北から)			

# Ⅰ章 調査の概要

#### 1. 調査要項

事業名:町内遺跡発掘調査事業調査主体:厚沢部町教育委員会

調 查 地:北海道檜山郡厚沢部町字城丘120-1、122-1、123-1、160、168-1、168-3、178、179-2、376

調査面積:掘 削 2,317㎡ (うち史跡内1,227㎡、史跡外1,090㎡)

掘削無 4,550㎡

調査期間:現地調査:平成21年5月11日~平成21年8月28日 整理作業:平成21年9月1日~平成22年3月31日

#### 2. 調査体制

厚沢部町教育委員会事務局

教 育 長 朝倉勝春(10月9日まで)

中井文夫 (10月10日から)

事務局長 斎藤洋子

事務局次長 進藤貞治

社会教育係 石井淳平 (発掘担当者)

社会教育係 三戸康彰

社会教育係 船瀬祥太

社会教育係 笠原 健

調査補助員

安達優子

発掘調査作業員

天野信一、佐々木真弓、沢野みどり、武田睦子、長尾数利、和田利憲

#### 3. 調査にいたる経緯

館城跡は、昭和41年7月7日付北海道教育委員会広報第2945号の告示(北海道教育委員会告示第65号)により、道指定史跡となった。

昭和63年頃から、町では国の史跡指定へ向けての取り組みを進め、昭和63年9月29日~10月13日、平成元年10月2日~11月4日、平成2年10月2日~16日の3ヵ年にかけて、遺構確認調査を行った。この3カ年の調査では、館城跡東部の溝や柵の所在が明らかとなった。これらの成果を受け、平成13年6月25日、史跡松前氏城跡福山城跡の追加指定の申請をし、平成14年9月20日付官報号外第208号で、「史跡松前氏城跡福山城跡館城跡」として国指定の告示(文部科学省告示第183号)がなされた。

平成15年7月に担当職員を配置し、平成17年から2カ年で保存管理計画を策定した。また、平成17年度から、保存管理計画策定に必要な堀・土塁など館城跡の外郭線を構成する遺構及び、「散兵壕跡」の内容確認調査を実施した(厚沢部町教育委員会2007)。平成18年度の調査により、館城跡西辺の堀・柵列の所在を明らかにすることができたが、西辺の堀の北側延長は史跡指定地外の町道(上館城ノ岱

線) 下へと延びているため、追跡調査が不可能な状況となった。

このことから、外郭線確認のための発掘調査を継続して実施することとし、平成19年度から21年度までの3カ年の調査を実施した。

平成19年度は、地籍図及び航空写真の分析により、現在確認している西辺の堀のさらに西側に、より大きな区画が存在する可能性が浮上したことから、これまで部分的にしか発掘調査が実施されていなかった館城跡南西部において、堀・柵列の所在確認調査を実施した。当初の予想に反し、西辺の堀の西側により大きな区画が存在する可能性は否定された。

平成20年度は南辺の堀・土塁・柵列の構造及び残存状況の確認(第1調査区113㎡)と北東部の堀・柵列の所在確認(第2調査区1,329㎡)を目的として調査区を設定し、第2調査区では堀・柵列の延長を確認するとともに「伝米倉跡」と呼称した地点では、表土直下から多量の炭化米と広範囲の焼土層、厚さ約50cmの整地層を検出した。

これらの調査成果に基づき、平成21年度は館城跡西辺及び北辺の外郭線確認(第1調査区、2-1調査区、2-2調査区)、北東部の整地層範囲及び外郭線確認(第3調査区)、南西部の堀・土塁・柵列の構造確認(第4調査区)を行った。また、礎石の地表面検出を行い、測量調査を実施した(第5調査区)。

#### 表1 館城跡発掘調査の経過

年 度	調査地区	面 積 (m)	調査の目的	調査結果
	南辺土塁地区		南辺土塁構造確認	
昭和63	東辺地区		東辺の堀・柵列の 所在確認	堀・柵列の所在を確認
~平成2年	西辺地区南部	2,400	西辺の堀・柵列の 所在確認	堀・柵列の所在及びそれらが、さらに北 方に延びることを確認
	郭内地区		郭内の建物の所在 確認	柱穴列、建物跡を確認
	南辺土塁地区		南辺土塁構造確認	
平成17年度	「散兵壕跡」地区	386	「散兵壕跡」の構造 確認	風倒木痕であることを確認
	北辺地区		北辺の堀・柵列の 所在確認	所在を確認できず
平成18年度	西辺地区	1,798	西辺の堀・柵列の 所在確認	調査区西側へ延びることを確認
平成19年度	南西部地区	397	南辺の堀西側の範 囲を確認	当該地区の堀及び柵列の所在が明らかに なるとともに、近代の水路等の攪乱との 関係が問題となった
平成20年度	南西部地区 (第 1 調査区)	113	南辺の堀・土塁・ 柵列の構造及び 残存状況確認	堀と近代の水路が別の時期に構築された ことが明らかとなった 柵列の柱痕が良好に検出
170%20平1交	北東部地区 (第2調査区)	1,329	北辺の堀・柵列の 所在確認	館城跡北東部の堀及び柵列の所在を確認 「伝米倉跡」周辺の整地層を確認

#### 4. 調査結果の概要(図1)

平成17年から再開された館城跡の発掘調査は、館城跡の外郭線を構成する堀・土塁・柵列の所在確認を目的として実施され、現在、東南二面の堀・柵列についてはほぼその所在が確認されている。しかし、西辺の堀・柵列についてはその北半が、北辺については北東部を除いて、その所在が確認されていない。今年度の調査では、西辺及び北辺の堀・柵列を確認することを主たる目的として調査区を設定した。併せて、館城跡の中心部分(旧町有地 字城丘160、168-1、168-3)において礎石が良好に残存することから、これらの配置状況についてピンポールを用いた地表面確認を行った。

表 2 平成21年度調査の概要

年 度	調査地区	面 積 (m³)	調査の目的	調査結果
	史跡外西側地区 (第1調査区)	1,090	平成18年度に検 出した堀・柵列の 延長の確認するた め、史跡外西側に 調査区を設定	町道東側までは堀が所在することを確認 したが、町道西側では堀・柵列を確認で きなかった。町道道路敷地盛土下で道路 拡幅以前の用水路を検出した。堀を踏襲・ 再利用した可能性もある。
	北辺地区 (第2調査区)	788	北辺の堀・柵列の所在確認を目的として町道東側と「伝米倉跡」北西の二カ所に調査区を設定	いずれの調査区でも堀・柵列は確認でき なかったが、自然の流路が検出され、こ れが館城北辺の区画として機能した可能 性が高まった。
平成21年度	北東部地区 (第3調査区)	292	「伝米倉跡」西側 の整地層及び区画 施設の所在確認	平成20年度調査で検出した柵列の延長上で「溝状遺構」を検出した。柱痕を確認することはできなかったが、区画施設の可能性が高い。
	南西部地区 (第4調査区)	147	南西部の屈曲部分 における堀・土塁・ 柵列の位置関係の 確認	堀・土塁・柵列が良好に残存することを 確認した。柵列は堀・土塁と並行して屈 曲する。
	郭内地区 (第5調査区)	4,550	礎石の残存状況及 び建物配置の確認	247基の礎石を検出した。『増田家文書』 に記載のある『館城平面図』の建物に類 似する5.5間×27間の配列が確認された。 「奥御殿」に相当する建物である可能性 が想定される。また、「伝米倉跡」南側 では5間×13間の礎石配列を確認した。

<sup>\*</sup>なお、館城跡南西部の調査を実施した平成20年度第1調査区については、平成21年度第4調査区とあわせて今回報告を行う。

#### 5. 調査の経過

#### (1)調査準備等

- 2月12日 平成21年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書提出
- 2月13日 現状変更許可申請書提出
- 3月13日 第1調査区(字城丘)に係る農地転用許可申請書提出
- 4月1日 21庁財第8001号により国宝重要文化財等保存整備費補助金交付決定
- 4月17日 20委庁財第4の2072号により現状変更許可
- 4月30日 厚農委第22号指令により農地転用許可

#### (2) 現地調査

5月11日 発掘作業員雇用契約の締結、借上げ車両・借上げ仮設ハウス納品、第1調査区予定

地賃貸借契約締結、第1調查区基準杭打設作業開始、第1調查区表土掘削作業開始

- 5月13日 作業員契約事務及び業務説明、環境整備、第1調査区残土処理
- 5月20日 第1調査区サブトレンチ掘削作業開始(サブトレンチ1から順次作業開始)
- 5月27日 第1調査区サブトレンチ埋戻し作業開始
- 5月29日 第1調查区調查終了、第4調查区表土掘削作業開始、第2調查区基準杭打設
- 6月8日 第4調查区柵列柱痕検出作業開始
- 6月10日 第2調查区表土掘削作業開始、第5調查区礎石検出作業一部着手
- 6月14日 明治維新学会巡検(駒沢大学文学部教授小泉雅弘氏ほか37名来現場)
- 6月16日 2-1調査区残土除去作業開始
- 6月19日 第4調査区調査完了
- 6月25日 2-2調査区流路検出
- 7月2日 第1調査区埋戻し作業完了
- 7月7日 2-1調査区調査完了
- 7月9日 第3調査区表土掘削作業開始
- 7月15日 厚沢部町女性交流協議会会員20名、七飯町歴史館友の会会員20名来現場
- 7月21日 第3調查区遺構検出作業開始
- 7月26日 発掘調査現地説明会開催(参加者21名)
- 7月28日 奈良大学文学部教授千田嘉博氏(館城跡調査検討委員会)現地指導
- 7月29日 第1回館城跡調査検討委員会現地視察、町民向けミニパネルディスカッション開催
- 7月30日 第1回館城跡調査検討委員会会議、第4調査区埋戻し作業開始
- 8月4日 第3調査区細部地形レーザー計測作業開始
- 8月5日 第5調查区「本丸建物」周辺礎石検出作業完了
- 8月7日 第5調査区「米倉建物」周辺礎石検出作業完了、礎石トータルステーション計測作 業開始
- 8月11日 第3調査区埋戻し作業開始
- 8月12日 礎石トータルステーション計測作業終了
- 8月14日 第3調査区埋戻し作業完了、調査機材洗浄搬出等現場撤収作業完了、補助員を除く 作業員雇用契約期間満了

#### (3)整理作業

- 8月17日 整理作業開始
- 8月26日 遺物実測・トレース作業開始
- 8月27日 第2調査区埋戻し作業完了
- 8月28日 現状変更終了報告提出
- 9月11日 文化庁文化財部記念物課佐藤正知主任調査官来町・現地指導
- 9月18日 遺物実測・トレース作業完了、遺物図版作成開始
- 9月25日 遺構図面トレース・図版作成作業開始
- 9月26日 文化庁文化財部記念物課内田和伸主任調査官来町・現地指導
- 9月29日 調査補助員雇用契約期間満了
- 10月8日 平成21年度館城跡発掘調査成果展開始(図書館ロビー・館地域振興センター、館小学校、館中学校巡回展示)

10月22日	第2回館城跡調査検討委員会現地視察・会議	
10月23日	第2回館城跡調査検討委員会関連史跡視察(上ノ国町洲崎館跡、松前町福山城路	<b></b> (
11月16日	平成21年度調査に係る事務連絡及び平成22年度事業ヒヤリング(北海道教育庁5	到
	館 9 階)	
11月20日	デザイン文化研究室代表大萱昭芳氏来町・現地指導	
平成22年		
1月13日	国宝重要文化財等保存整備費補助金計画変更承認申請書提出	
2月5日	発掘調査報告書原稿入稿	
3月14日	平成21年度館城跡発掘調査成果報告会開催	
3月31日	発掘調査報告書刊行	

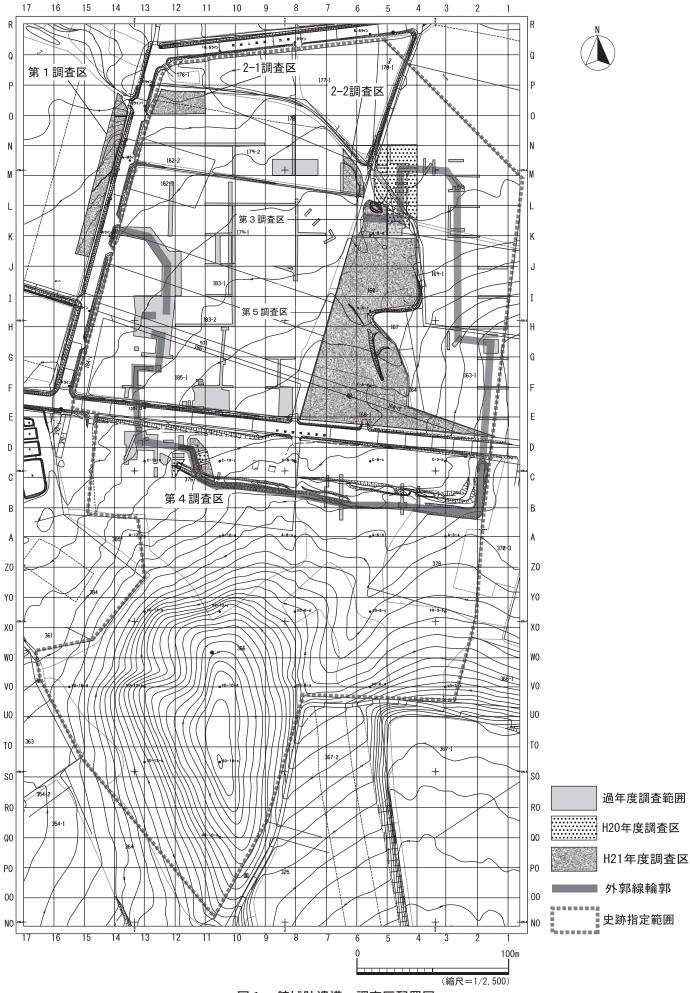


図1 館城跡遺構・調査区配置図

# Ⅱ章 遺跡の位置と環境

#### 1. 地理的環境

#### (1) 位置と地形(図2~4)

厚沢部町は、北海道南西部渡島半島に所在し、北緯41°47′~42°03′、東経140°09′~140°28′に位置する。江差町、上ノ国町、木古内町、北斗市、森町、八雲町、乙部町と界を接し、町域は厚沢部川とその支流である安野呂川、鶉川の三河川の流域にまたがり、総面積は460.42km、東西約29km、南北約27kmの広がりをもつ。

館城の所在する館地区(厚沢部町字新栄、字当路、字中館、館町、南館町、字城丘、字富里の総称で旧大字館村にほぼ一致する地域)は、東側を日本海と太平洋との分水嶺を形成する山塊、南側及び西側を梯子山、幌内岳、五郎助岳などの標高500m級の山々、北側を字中館のなだらかな丘陵地帯に囲まれた盆地である(図3)。盆地の規模は、古佐内川と厚沢部川の合流点付近の地峡から佐助沢、泉沢の合流地点までの東西約9km、南館の市街地から館町市街地までは南北約1.5kmである。

館城跡は、厚沢部川左岸の盆地の南西、厚沢部川とその支流である糠野川の合流地点から東へ約1kmに位置する。南方から延びる舌状台地上に立地し、遺跡周辺は南から北に向かって緩やかに傾斜する。遺跡の標高は約50mで、糠野川に面した平坦面からの比高差は約20mである。遺跡の北、西、東は開け、南は比高差約30mの小丘陵(通称「丸山」)となっている。

#### (2) 地質

館地区の地質は、新第三紀に形成された厚沢部層、館層、鶉層などのシルト岩や砂岩によって形成され、さらに、これらの基盤として、古生代の松前層群と中生代の上磯層群がある。新第三紀中新世前期には、グリーン・タフ変動に伴う火山活動により福山層の堆積があり、中新世中期の大規模な海進により、檜山層群が堆積する。厚沢部層の時期に現在の向斜軸(館城跡、鶉町市街地の東側をとおり、南北方向に延びるライン)より東側の沈降に伴って、多量の堆積物が形成された。

館盆地の中央部分では軟質の館層が広く分布することから、河川の浸食の影響を強く受け、広く開析された低平地が形成されている。字新栄から館町市街地にかけては、1段の河成段丘が形成され、現河床から約45~55mの比高差をもつ。段丘堆積物は、松前層群からの供給によるチャート・砂岩・粘板岩などの礫で構成される。館町、字当路、字新栄では沖積平地が発達し、厚沢部川の氾濫原を構成する(参考文献:北海道開発庁1970、工業技術院地質調査所1975)。

#### (3) 館城跡関連遺跡(図2)

館城跡及び箱館戦争関連遺跡として、①官軍の沢、②稲倉石古戦場、③鶉村古戦場、④丸山古戦場、 ⑤ロクロ場、⑥開墾役所跡、⑦米揚岱などがある。①は、明治2(1869)年に新政府軍の進撃路となった沢、②~③は館城攻防戦にともなう古戦場、⑤~⑥は安政年間に設置されたとされる開墾役所跡とそこへ荷揚げした伝えられる地域である。⑦は館城跡に物資を荷揚げしたと伝えられる地域である。

②稲倉石古戦場は、明治元(1868)年11月10日、館城攻略のため箱館五稜郭を出陣した旧幕府軍一聯隊と松前藩兵との戦闘が行われた古戦場である。古戦場は、現在の鶉ダム築堤付近と推測され、ダム建設地に選定されたことから明らかなように、急峻な岩山からなる地峡である。この地点を旧幕府軍に突破された場合、その背後は鶉川が開析した平野が広がり、館城までの進撃を許すこととなる。松前藩としては館城防衛上、稲倉石の守備は必須であった。そのため、松前藩は谷底の道路を封鎖し、小口径砲数門を装備した陣地を構築していた。旧幕府軍による陣地の攻略は困難とみられたが、左右

の岩山から狙撃されたため、支えきれずに陣地を捨てて敗走した。

③鶉村古戦場は、鶉村に宿陣した旧幕府軍の本陣を松前藩軍が強襲したことから起こった戦闘である。稲倉石で松前藩軍を敗走させた旧幕府軍は、11月13日鶉村(現字鶉)へ進軍し、ここに宿陣する。翌14日、2小隊を偵察のため館村へ派遣したところ、俄虫村(現本町・新町ほか)方面から進んできた松前藩兵が鶉村本陣を襲撃した。旧幕府軍は暫時の戦闘の後これを撃退している。

④丸山古戦場は、旧幕府軍の偵察隊と館城から進出した松前藩側の偵察隊との小競り合いである。 11月14日、旧幕府軍が2小隊を偵察のため館村へ派遣したところ、鶉村から館盆地へと越える小丘 陵において、松前藩兵と遭遇し、戦闘となった。この戦闘では、旧幕府軍のラッパの音に驚き、松前 藩兵が敗走したことが「麦叢録」(菊地1998) などに記されているほか、松前藩側の証言からも確認 されている(『櫻鳥-厚沢部町の歩み-』p448)。

⑤開墾役所跡は、館城築城以前に松前藩が設置したとされる役所の跡である。 次節 5 項で詳述する。

#### 2. 館城築城とその経緯

#### (1) 13代藩主崇広の死去と徳広の藩主就任

松前藩13代藩主松前崇広は、慶応2年四月に病死する(『北門史綱』巻六 永田1991)。

崇広の死後、12代藩主の嫡子徳広が藩主に就任するものの、病弱な徳広は政務を執ることができず、 藩政の中枢は、松前勘解由など崇広時代の重臣らが掌握したままであった。こうした状況に反発する 反勘解由派の藩士達が、『建言書』(『慶応二丙寅十一月旧寄合中より建言書』 江差町史編集室1979) を藩主徳広に上申した。これにより松前勘解由は家老職を辞すこととなるが、反勘解由派の蠣崎民部 らは脱藩の罪に問われ、また、藩政は依然として勘解由派が取りしきっていた。

#### (2)正議隊のクーデター

明治元(1868)年7月28日、反勘解由派の藩士達は、『正議隊建白書』(江差町史編集室1979)を藩主徳広に提出した。『建白書』を受けた徳広は、勘解由ほか4名の重臣の登城を差し止めたが、勘解由らはこれに従わず、町役所に諸士を呼び集め密議を行なったという(『奉命日誌』江差町史編集室1979)。

7月29日、江差奉行尾見雄三が、江差在郷藩士らを率いて江差から出動し、8月1日に福山城下へ到着した(『慶応四年四月より行事見聞録』江差町史編集室1983)。尾見は、かねてから江差在郷の藩士や江差商人団を反勘解由派に引き込んでおり、江差商人団が反勘解由派の資金源となったとの見解がある(『江差町史』第六巻通説二p5)。

尾見の到着により勢力を増した正議隊は、8月1日から勘解由派の粛清を開始した。一連の粛清は、9月24日の山下雄城の処刑をもって一段落し、勘解由派の主要人物のほとんどを殺害する結果となった。

#### (3)館城の築城

勘解由派に対する大量粛清により藩政の実権を手にした正議隊首脳部は、館村への築城を計画した。『奉命日誌』9月11日の項に「館村へ御築城願書壱通ハ下国東七郎ヲ以テ 太政官へ進達 壱通ハ雄 三裁判所へ進達」とあり、館城築城に係る願書が、下国東七郎によって太政官及び箱館裁判所へ提出された。この築城願書に対する新政府築城許可書は11月11日付で交付されている(『江差町史』巻六通説二p36)。『報功心血』(函館市中央図書館蔵)では、「館村移城を決すると雖ども、未だ朝廷の裁可を得ざるの間は、公然たる経営を唱ふる能はず。故に勧農の名に籍りて、これが準備に従はしむるの内儀となり」とあり、鈴木文五郎、牧村可也、今井愚一、鈴木次郎蔵、三浦巽、石塚和平が「準備

委員」として「専任」された。『奉命日誌』 8月28日の項には、氏家丹宮、鈴木又五郎、牧村可也、今井晦輔、鈴木次郎蔵、石塚知平、三浦巽らが勧農方として江差表へ出張を命じられ、関川平四郎が御先手組へ取り立てられ、勘定奉行・作事方を命じられたことが記されている。すなわち、館城築城について、8月末の段階では新政府の許可が得られていないため、勧農の名目によって現地作業が開始されたと考えられる。

館城築城工事の経過は、勘定奉行兼作事方を任命された江差の豪商、関川重孝(平四郎)が残した 日記によって、うかがい知ることが出来る(江差町史編集室1981)。以下、関川平四郎日記により、 館城築城工事の様子を考える。

9月2日に館村の鈴木文五郎に宛てて遠眼鏡を送ったことが記されており、この時期に、担当者が現地入りしていたことを知ることができる。9月14日には、大工四十人・木挽十人が館へ向けて出立している。9月21日には、福山から大工棟梁孝次郎はじめ、下職28名が江差へ到着し、館へ向けて出立している。

また、9月12日頃から土木作業が開始されており、9月23日現在の延べ人工数は、1,525人工に達している。9月28日現在の館城普請に係る人員は、大工棟梁浜田仁兵衛、幸治郎以下、大工小頭五人、木挽2人、平大工92人、下木挽21人、土方小頭7人、土方243人、人足183人となっている。

10月14日には、建具師3人が木材と供に館へ向かっており、また、10月16日には、間似合、唐紙、玉子などの襖材料が館へ送られており、館城普請は、内装作業へと移りつつあったことがわかる。

10月24日には、棟上げの儀式が行われたことが記されており、城内の重要な建物の棟上げが行われたことを知ることができる。10月26日には、七飯峠下での旧幕府軍と新政府軍との戦闘を受けて、三上超順や今井興之丞が、手勢を引き連れて木間内まで出張している。館城普請の最終的な結果については触れられていないが、関川重孝の築城日記もこの10月26日をもって終わっており、この前後に、館城の普請もほぼ終了していたと考えられる。

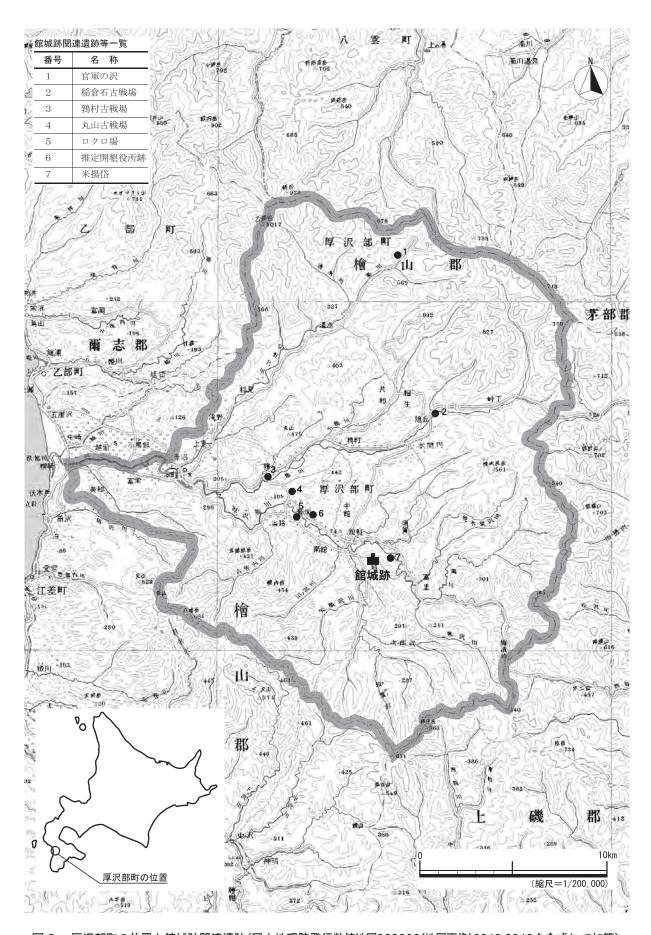


図 2 厚沢部町の位置と館城跡関連遺跡(国土地理院発行数値地図200000(地図画像)6240、6340を合成して加筆)

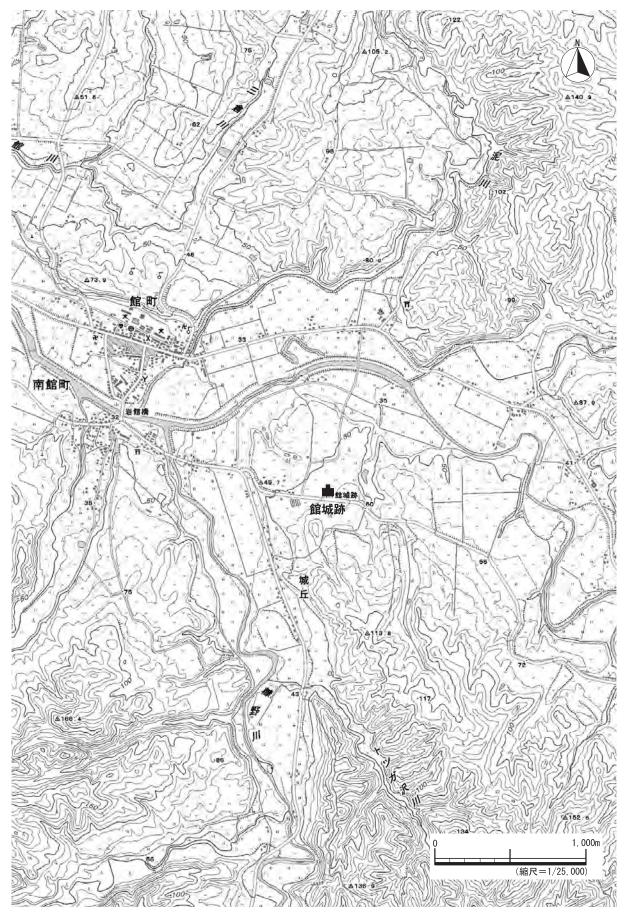


図3 館城跡の位置と周辺の地形(国土地理院発行数値地図25000(地図画像)624062に加筆)

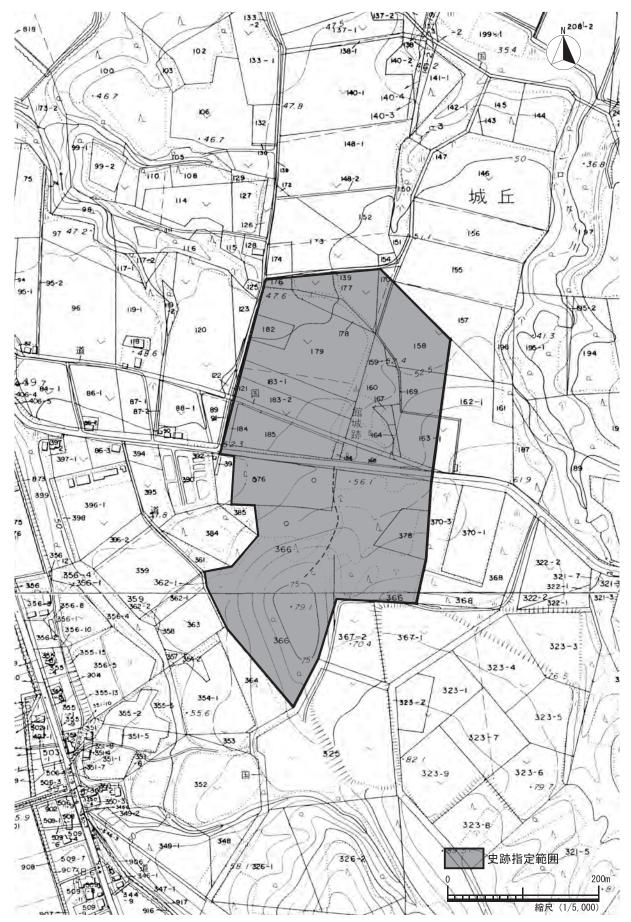


図4 指定地周辺の地形と指定範囲

# Ⅲ章 調査の方法

#### 1. 発掘調査基線(図5)

1988年~1990年の発掘調査グリッドを踏襲することとした。このグリッドは、平成14年の測量法改正以前の旧日本測地系(平面直角座標系XI系)に沿って設定された20m方眼を基本とし、南から北へ向かってA、B、C、・・・、東から西へ向かってO、1、2・・・としている。なお、Aラインより南側については、北から南へ向かって、ZO、YO、XO・・・と表記する。

この方眼は、直交するラインの交点から北西の20m平方を、その交点のアルファベットと数字の組み合わせで呼称し(例:B-2)、さらに10m方眼の小グリッドに分割した。小グリッドは、グリッドの基点となる交点(杭の打設位置)から反時計まわりに a、b、c、d とした(例:B-2-c)。

今年度の発掘調査に使用したグリッド杭は、平成17年に(有) 安藤測量設計事務所に委託し、指定地内町有地及び指定地周辺

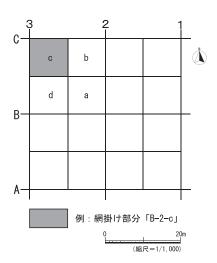


図5 グリッドの呼称方法

の町道におよそ50m間隔で設置した基線杭を基準に格調査区域へ打設した。各調査区へ打設したグリッド杭の基準点は下表のとおりである。

表 3	平成21年度館城跡発掘調査基準杭と座標	(世界測地系平面直角座標XI系)

調査区名	基線杭名称	X座標	Y座標	標高
第1調査区 第2調査区	13ライン2	-235558.264	7606.678	53.628
	C-13-b	-235593.580	7606.679	53.650
第3調査区 第5調査区	Н-5-с	-235493.584	7756.681	52.743
	K-5-d	-235443.584	7756.680	52.194
第4調査区	C-13-b	-235593.580	7606.679	56.912
	С-10-с	-235593.581	7656.680	55.497

#### 2. 調査の方法

#### (1) 掘削

第1調査区及び第2調査区の表土掘削にバックホウ(平積0.35㎡)を使用した。表土掘削後、人力による残土除去及び調査区壁の清掃を行った。

第3調査区及び第4調査区は人力による表土掘削を行った。草根の及ぶ $5\sim10\,\mathrm{cm}$ の深さまではスコップ・ジョレンを使用し、それ以下の掘削には移植ゴテを使用した。

いずれの調査区においても掘削は表土(I層)にとどめ、サブトレンチなど部分的に掘り下げを行った箇所以外、II層以下への掘削は行っていない。

遺構の掘削には移植ゴテを利用した。

第5調査区は地下への掘削は行わず、ピンポールを使用した地表面での礎石確認と除草による検出

を行った。

#### (2) 現地測量

現地での実測図面は縮尺20分の1を基本とした。調査区全体遺構配置図及びその周辺の地形測量図は100分の1で作図した。

遺構の平面測量は、グリッド杭を基準として設定した簡易な水糸遣方により、手作業で行った。水準測量は、水準点が設置された基線杭から直接計測した。使用機材はオートレベルと5mm目盛りのアルミスタッフで、基線杭と対象との比高を直接観測して行った。

遺物の取り上げは原則として出土グリッド及び層位ごとに行い、グリッド、層位、日付を記録した。グリッドは10m平方の小グリッド単位での表示を基本とした。第5調査区については、建物毎に桁行を1、2、3・・・、梁行をい、ろ、は・・・とする半間四方のグリッドを設定し、このグリッド毎に取り上げを行った。

#### (3)細部地形レーザー計測

「伝米倉跡」の整地層や柵列などの微細な地形データを高精度で記録し、さらに調査成果のCG表現等による活用のために、3次元レーザースキャナーによる地形測量を実施した。

測量業務は株式会社シン技術コンサルに委託し、実施した。使用機材はニコントリンブル製GS 200で、10mmピッチのメッシュ計測を行った。

納入成果品は測量成果のほか、AdobeReader互換による3次元画像2種類とした。図20~22の「3次元現況地形図」は位置情報+画素情報を有するスキャンデータ(点群写真画像)を使用した。これを印刷品質に必要な解像度まで拡大表示し、ビューワソフト(AdobeReader)画面上で印刷品質に必要な解像度で画像を切り出し、再結合したものである。

#### (4) 礎石トータルステーション計測

礎石の位置及び形状計測のため、光波距離計付トランシットによる計測を行った。データ取得精度は500分の1作図精度とし、礎石の平面形状及び主要な稜線について計測を行った。取得データはDXF形式及びai形式(Adobe Illustrator形式)で納品を受けた。

#### (5)写真記録

写真記録は調査前、調査状況、遺構等検出状況、土層断面、調査終了状況等を撮影した。撮影機材は、Mamiya RB67 PROFESSIONAL SD (中判フィルムカメラ) + Mamiya KL65mmF4LとM amiya KL127mmF3.5L及びNikon D70S (デジタル一眼レフカメラ) + Nikkor AiAF20mmF2.8 D + Nikkor AiAF50mmF1.4Dで、中判カメラでは、120サイズのリバーサルフィルム(フジクローム プロビア100F (RDPII120))を使用した。デジタルカメラは、2240×1488ピクセルのJPEG形式で撮影・保存した。

遺物撮影も同様のシステムを使用し、中判カメラではリバーサルフィルム(フジクローム T64 (R TP120)) を使用した。

写真記録は、原則として、中判カメラ、デジタルカメラともに同一カットを撮影し、デジタルカメラでは、この他に、調査状況写真や途中経過写真等を撮影し、調査記録の一助として活用した。

#### (6) 1次整理

出土遺物は、調査終了後に水洗し、分類、一覧表作成、注記等の一次整理作業を行った。注記は遺跡名 (TJ08)、遺構またグリッド名称、層位、取上げNo. の順に、白または黒のポスターカラーで記入し、その上にラッカーを塗布して保護した。

#### (7) 2次整理

現地測量図面は、必要な訂正や変更を加え一次原図とした。一次原図をスキャナ(CanonScan 8800F)でコンピュータ上に取り込み、Adobe Illustrator (CS) で編集及びトレースを行い、報告書印刷用図版とした。

写真記録のうち、リバーサルフィルムは、撮影順にネガアルバムに収納し、撮影時の記録(日付、撮影方向、撮影対象)をシールに記入し、ネガシートの上からそれぞれのフィルムに貼付けした。デジタルカメラ撮影分は、リバーサルフィルムと同一カット及び重要なものについてL判(12.5cm×8.7 cm)に出力し、アルバムに収納した。オリジナルデータは、DVD-Rに保存した。

#### (8) 保管

出土遺物は整理作業終了後に遺物登録台帳を作成し、掲載・非掲載、遺構・包含層、分類、出土グリッドなどの基準で分別して収納し、さらに、厚沢部町郷土資料館収蔵品として、コンテナ、ダンボールなどの梱包単位毎に「厚沢部町郷土資料館収蔵資料台帳」に登録した。

原図・素図等の図面類、写真記録は厚沢部町教育委員会で保管する。

#### 3. 基本層序(図6)

基本層序の分類は、『館城趾 遺構確認調査報告書』(厚沢部町教育委員会・十勝考古学研究所1989年)のそれ(以下旧層序)を踏襲した。なお、基本層序の土色、土性は、平成17年調査の南側盛土西部(第1調査区)における断面観察の結果を基準としている(厚沢部町教育委員会2007-図8参照)。

遺物包含層は I 層及び II 層で、 III 層以下は腐植土の発達しない旧石器時代以前の堆積層の可能性が高い。

I層:表土・耕作土 黒褐色 (10YR2/2) 埴壌土 粘性中 堅密度堅 草の根の混じる地表面下約10cmの自然堆積層及び耕作土を総称した。旧層序 I層に相当。

Ⅱ - 1 層: 黒色 (10YR2/1) 埴壌土 粘性中 堅密度堅 旧層序Ⅱ層に相当。

Ⅱ-2層:にぶい黄橙色(10YR6/4)砂壌土 粘性弱 堅密度軟 降下火山灰と考えられる砂質の堆積層である。遺跡周辺では、平坦地で約5cmの層厚が一般的のようである。旧層序Ⅲ層に相当。

Ⅱ - 3 層:黒褐色 (10YR2/3) 埴壌土 粘性中 堅密度堅

土性はII-1層に似る。黄色味を帯びるのはII-2層の影響と推測する。旧層序IV層に相当。

Ⅱ-4層:黒色 (10YR2/1) 埴壌土 粘性中 堅密度堅

土性、土色ともにII-1層によく似るが、土質の粒状性がやや緻密で、土色はやや明るいように感じる。旧層序V層に相当。

Ⅲ層:褐色(10YR4/6) 埴壌土 粘性中 堅密度堅 旧層序Ⅷ層に相当。



図 6 基本層序模式図

# Ⅳ章 遺構と出土遺物

#### 1. 第1調査区(図7~13、写真2~5)

#### (1)調査区の概要

平成18年度調査区で検出された堀・柵列の延長を検出することを目的として、史跡指定地外西側の耕作地に幅約10m、長さ約110mの調査区を設定した。調査の結果、堀・柵列は耕作地まで伸びておらず、町道「上館城ノ岱線」の道路敷地内で屈曲し、北へ延びる可能性が高いと判断したことから、町道に沿って6箇所のサブトレンチを設定した。

#### (2)メイン調査区(図7、写真2)

南東から北西に緩やかに傾斜する。耕作深度は約40cmで、耕転方向である東西方向に暗渠排水の 痕跡を多く確認できた。調査区の北側は、「与惣吉沢」へと落ち込んでいく。

堀・柵列の検出はKラインから約5m北と予想されていたが、これを検出することはできなかった。 このことから、堀・柵列は町道「上館城ノ岱線」の道路敷地内で屈曲し、北へ延びる可能性が高いと 判断し、町道敷地の東西に6箇所のサブトレンチを設定し、堀・柵列の検出を行うこととした。

#### (3) サブトレンチ1(図8、写真3)

町道「上館城ノ岱線」の東側で平成18年度調査区に隣接する位置に幅約1m、長さ約7mの調査区を設定し、断面で堀を検出した。

規模・形状:開口部北側は排水用の塩化ビニール管の掘方で壊されているが、開口部の幅約1m、底面で0.4m、検出面からの深さ0.6mである。坑底は平らで箱堀状である。壁は坑底付近ではほぼ垂直に立ち上がり、坑底から約30cmのところから急激に外反する。

**土層**:図8A-A'土層1は塩化ビニール管の掘方。土層3~5は黄褐色ローム粒を多く含む。土層6~7は黒褐色土を主体とし、混入物をあまり含まない。

考察: 土層  $3 \sim 5$  は黄褐色ローム粒を多く含む均質な堆積であることから、埋戻しによる堆積と判断した。土層  $6 \sim 7$  は周囲からの土砂の流入による自然堆積である。

#### (4) サブトレンチ2(図9)

町道「上館城ノ岱線」を挟んでサブトレンチ1の反対側に位置する。メイン調査区で堀・柵列が検出されなかったことから、町道に沿って幅約1m、長さ約8mの調査区を設定した。調査区断面及び平面で堀・柵列、その他の遺構を確認することはできなかった。

土層: 図9 A-A'土層1~15は褐色ローム粒を含む黒褐色土を主体とし、基本層序Ⅲ層起源の黄褐色土で構成される。土層16は混入物の少ない黒色土である。

考察: 土層 1~15は町道造成に伴う盛土、土層16は旧耕作土である。

#### (5) サブトレンチ3 (図10)

町道「上館城ノ岱線」西側、サブトレンチ 2 から北へ約10mのところに幅約1 m、長さ約5 mの調査区を設定した。サブトレンチ 4 及び 5 で溝状の遺構を検出したことから、調査区北端を東側に1 m 拡張し、溝状の遺構を検出した。

規模・形状: 溝状の遺構の東側立ち上がりが調査区外となることから、幅は不明、検出面からの深さは約0.2mである。坑底は平らで、約45°で内湾気味に立ち上がる。

方位:平面検出範囲が狭いため不正確だが、N-13°-Eである。

**土層**:図10A-A'土層1~2は黒褐色土主体で黄褐色ローム粒を少量含む。A-A'土層3~4は黄褐

色土主体である。 B-B' 土層 1 は黒褐色土主体、土層 2 は明黄褐色土主体、土層 3  $\sim$  4 は黒褐色土主体である。

考察: A-A' 土層  $1 \sim 4$  、 B-B' 土層  $1 \sim 2$  が町道造成に伴う盛土である。 B-B' 土層 3 は周囲からの流れ込みによる自然堆積、A-A' 土層 5 、 B-B' 土層 4 は旧耕作土である。

#### (6) サブトレンチ4(図11)

町道「上館城ノ岱線」西側、サブトレンチ3から北へ約15mのところに幅約1m、長さ約5mの調査区を設定した。坑底面の幅約0.6mの溝状の遺構を検出したことから、調査区北端を東側に1m拡張した。

規模・形状: 坑底面での幅約0.6m、検出面での開口部の幅は0.7m、検出面からの深さは0.15mである。 坑底面は平らで幅約10cmの溝が等間隔で並ぶ。壁は外反しながら約60°の角度で立ち上がる。

方位:平面検出範囲が狭いため不正確だが、N-15°-Eである。

**土層**:図11A-A' 土層  $1 \sim 3$  は黄橙色土が主体、土層  $4 \sim 7$  は黄褐色ローム粒を少量含む黒褐色土である。

考察: 坑底面に等間隔に並ぶ幅約10㎝の溝はパワーショベル等のバケットの痕跡であろう。土層1~3は基本層序Ⅲ層に由来するしまりのある黄橙色土で、町道「上館城ノ岱線」造成に伴う盛土である。土層4~5、7は町道「上館城ノ岱線」拡幅以前の耕作土である。土層6は周囲からの土壌の流入による自然堆積層である。

#### (7) サブトレンチ5(図12、写真4~5)

サブトレンチ4から北へ約15mのところに幅約1 m長さ約5 mの調査区を設定した。調査区の南北端を東へ1 m拡張し、溝状の遺構を検出した。

規模・形状: 坑底面での幅約0.6m、検出面での開口部の幅約0.7m、深さ約0.1mである。坑底面は平らで、幅約10cmの溝が等間隔で並ぶ。西側の壁は残存せず、東側はやや内湾気味に約80°の角度で立ち上がる。

**方位**: N-10°-E

土層: 図12A-A' 土層  $1 \sim 7$ 、  $9 \sim 10$ は黄褐色ローム粒を含む黒褐色土主体、土層 8、 11は褐色土、黄橙色土主体である。土層12軟質の黒褐色土である。図12B-B' 土層 1、  $3 \sim 6$ は黄褐色ローム粒を含む黒褐色土主体、土層 2、 7 は褐色土、黄橙色土が主体である。

考察: 坑底面に等間隔に並ぶ幅約10cmの溝はパワーショベル等のバケットの痕跡であろう。A-A'土層 $1\sim11$ 、B-B'土層 $1\sim7$ は黄褐色ローム粒を含む黒褐色土が主体、A-A'土層8、11、B-B'土層2、7は黄褐色土を主体とするが、いずれも人為的な堆積層で、町道「上館城ノ岱線」造成に伴う盛土である。A-A'土層12は溝状の遺構内に形成された自然体積層である。

#### (8) サブトレンチ6(図13)

サブトレンチ 5 のから北へ15mのところに幅約1 m、長さ約5 mの調査区を設定した。本調査区の北には「与惣吉沢」が位置する。

土層:図13土層  $1 \sim 4$ 、6、 $9 \sim 10$ は黄褐色ローム粒を含む黒褐色土で、土層 5、 $7 \sim 8$ は黄褐色土を主体とする。土層11は明黄褐色ローム粒をわずかに含む黒褐色土である。

考察: 土層  $1 \sim 10$  は黒褐色土及び黄褐色土で構成され、明黄褐色土がブロック状に含まれる。町道「上館城ノ岱線」造成に伴う盛土である。土層11は「与惣吉沢」へ続く落ち込みを人為的に埋戻した堆積である。

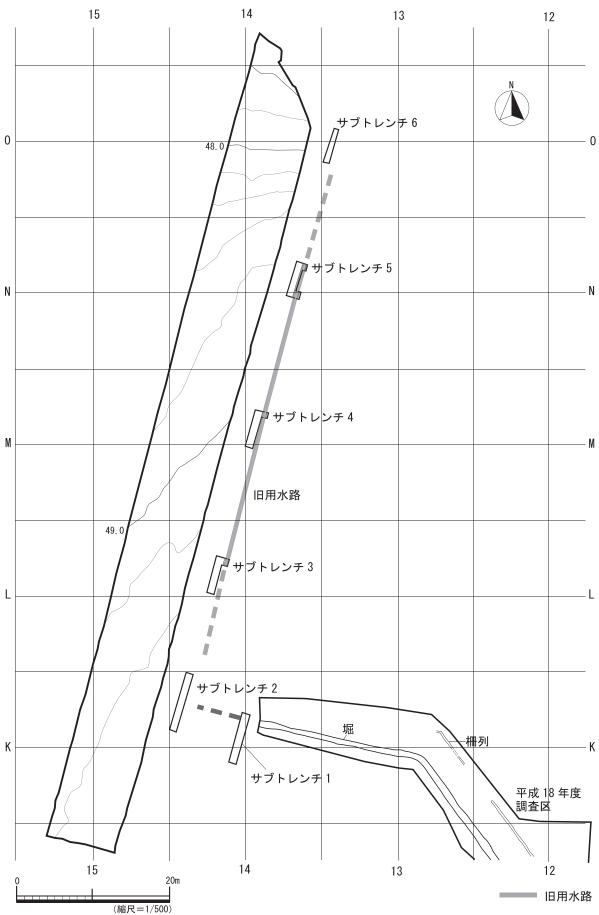


図7 第1調査区遺構配置図

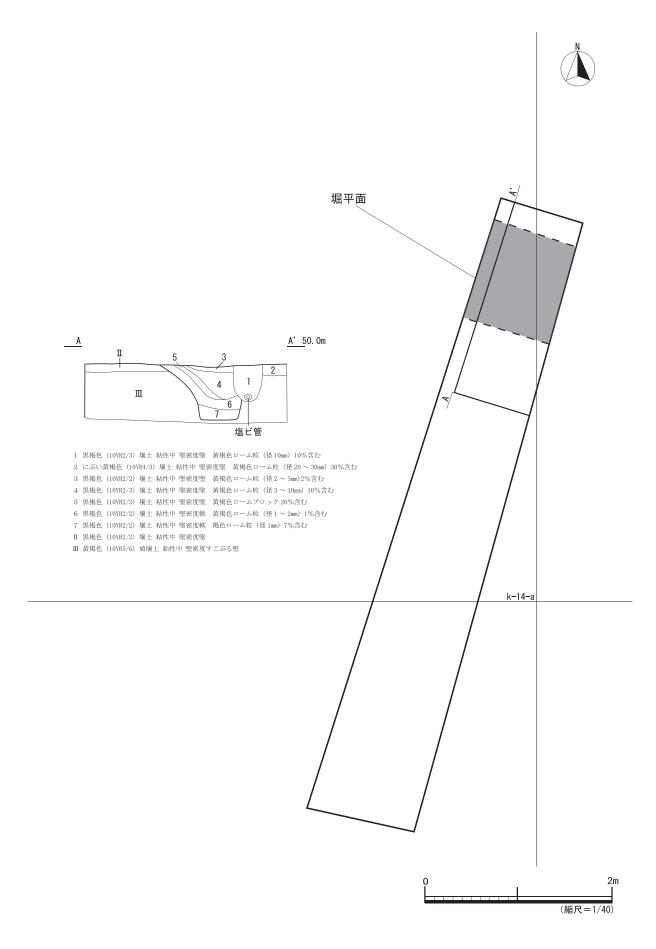
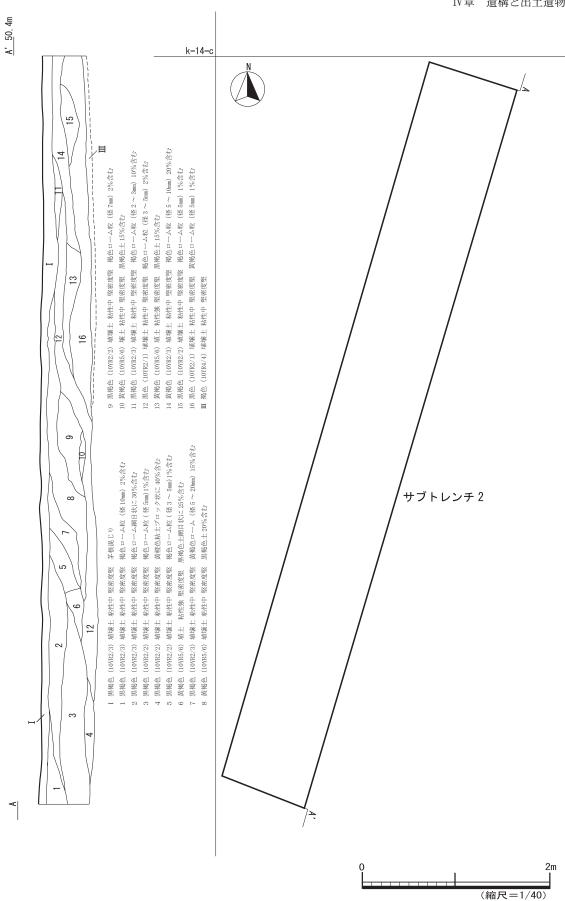
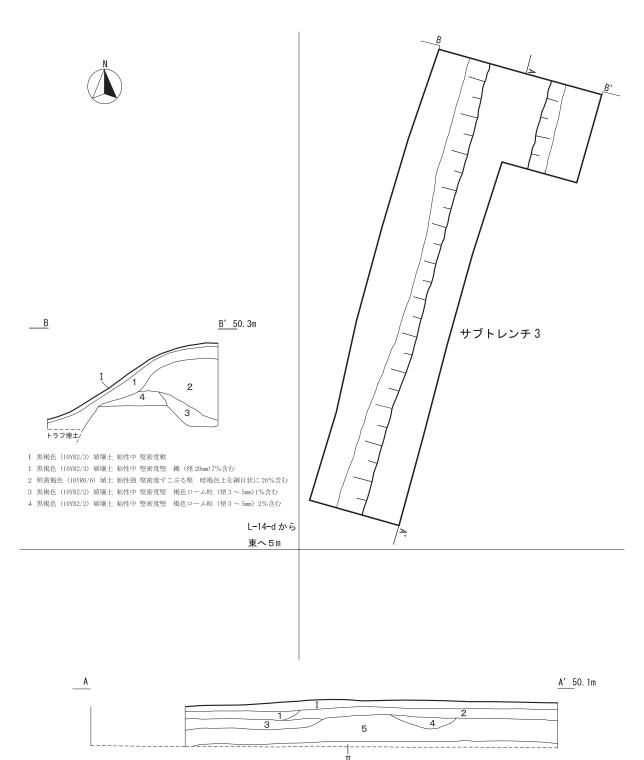


図8 第1調査区サブトレンチ1



第1調査区サブトレンチ2 図 9



- I 黒褐色 (10YR2/3) 埴壌土 粘性中 堅密度堅 砂礫 (径  $1\sim 2\,\mathrm{mm}$ )  $1\,\%$ 含む
- 2 黒褐色 (10YR2/3) 埴壌土 粘性中 堅密度堅 黄褐色ローム粒 (径 3 ~ 5mm) 2%・(径 30 ~ 50mm) 5%含む
- 1 黒褐色 (10YR2/2) 埴壌土 粘性中 堅密度堅 黄褐色ローム粒 (径 10mm) 3%含む 3 明黄褐色(10YR6/6)壌土 粘性強 堅密度すこぶる堅 黒褐色土網目状に 15%含む
- 4 にぶい黄橙色 (10YR7/4) 埴土 粘性強 堅密度すこぶる堅 黒褐色土網目状に 10%含む
- 5 黒褐色 (10YR2/2) 埴壌土 粘性中 堅密度堅 褐色ローム粒 (径 5mm) 1%含む
- Ⅱ 黒色 (10YR2/1) 埴壌土 粘性中 堅密度堅



図10 第1調査区サブトレンチ3

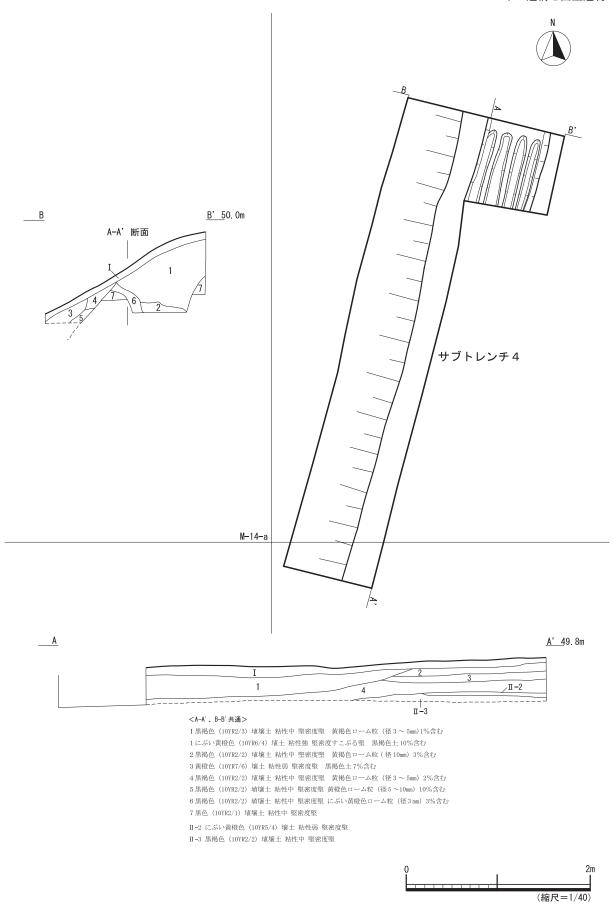


図11 第1調査区サブトレンチ4

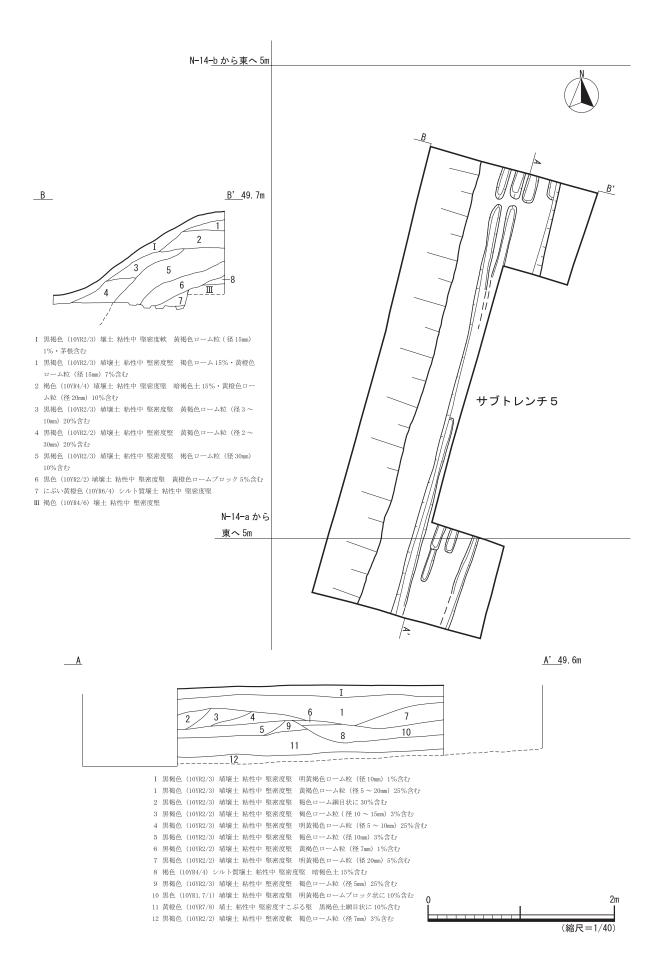
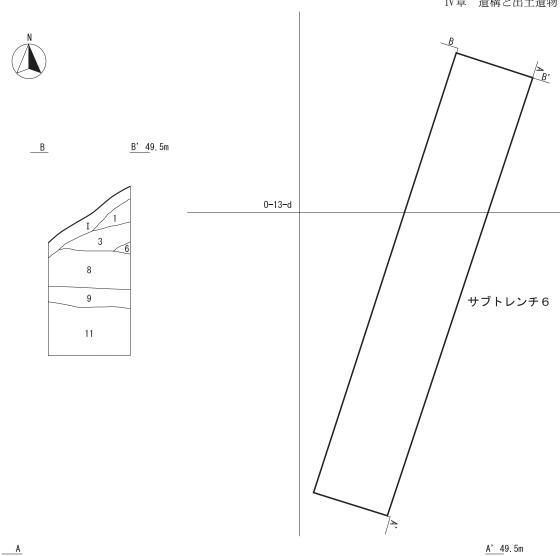
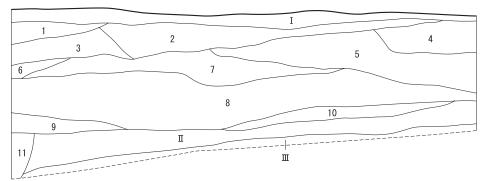


図12 第1調査区サブトレンチ5





#### <A-A'及びB-B'共通>

- I 黒褐色 (10YR2/3) 埴壌土 粘性中 堅密度軟 礫 (径 20mm) 2%含む
- 1 黒褐色 (10YR2/3) 埴壌土 粘性中 堅密度堅 礫 (径 20  $\sim$  30mm) 1%・黄褐色ローム粒 (径 20mm) 2%含む
- 2 黒褐色 (10YR2/3) 埴壌土 粘性中 堅密度堅 明黄褐色ローム粒 (径  $10\sim30$ mm) 7%含む
- 3 黄橙色 (10YR7/6) シルト質壌土 粘性中 堅密度すこぶる堅 暗褐色土網目状に 20%含む
- 4 黒褐色 (10YR2/3) 埴壌土 粘性中 堅密度堅 明黄褐色ローム粒 (径 20mm) 5%含む
- 5 黄橙色 (10YR7/6) シルト質壌土 粘性中 堅密度すこぶる堅 黒褐色土網目状に 25%含む
- 6 黒褐色 (10YR2/2) 埴壌土 粘性中 堅密度軟 黄褐色ローム粒 (径  $5\sim10$ mm) 3%含む
- 7 明黄褐色(10YR6/6)シルト質壌土 粘性中 堅密度すこぶる堅 暗褐色土網目状に 10%含む
- 8 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 埴壌土 粘性中 堅密度軟 明黄褐色ロームブロック状に30%含む
- 9 黒褐色 (10YR2/2) 埴壌土 粘性強 堅密度堅 黄褐色ローム粒 (径 3  $\sim$  5mm) 7%含む
- 10 黒褐色 (10YR2/2) 埴壌土 粘性中 堅密度堅 明黄褐色ローム粒 (径  $20\sim30$ mm) 15%含む
- (径5~10mm) 1%含む
- Ⅱ 黒色(10YR2/1)埴壌土 粘性中 堅密度堅
- Ⅲ にぶい黄褐色 (10YR4/3) 壌土 粘性中 堅密度堅



図13 第1調査区サブトレンチ6

#### 2. 第2調査区

#### (1)調査区の概要(図1)

史跡指定地北側を東西に流れる用水路は館城築城期から自然の流路として存在していた可能性が高いと判断されたことから、この自然の流路が区画の一部として機能していた可能性を検証するために、 用水路の南側に2箇所の調査区を設定し、柵列等の区画遺構の検出を行うこととした。

#### (2) 2-1調査区(図14~15、写真6~7)

史跡指定地北西端に位置し、第1調査区とは町道「上館城ノ岱線」を挟んで隣接する。パワーショベルで表土を掘削したところ、礫層が検出され、さらに湧水により掘削が困難となったことから、調査区の北側では生活面の検出を断念した。比較的、表土・礫層の薄い調査区南半部のみ生活面の検出をおこなった。

地形:南側から北へ向かって急激に傾斜する。調査区中央は入江状の低地となる。

遺構等:幅約1.3m、深さ約1mの溝を検出した。坑底に直径5~10cm、長さ1~2mに玉切したカラマツが敷かれている。埋土は埋戻しによるもので、Ⅲ層起源の黄褐色ロームがブロック状に含まれる。その他の遺構は検出されていない。

**土層**: 図15A-A' 土層 1 は径20mmの礫を含み、土層 2 ~ 5 は黒褐色土主体で、黄褐色ロームがブロック状に混ざる。土層 6 は黄褐色ロームを少量含む黒褐色土である。

考察: 坑底にカラマツが敷かれる溝については、カラマツの植林が道内で本格的に行われる昭和期以降の所産と推測する。調査区全体の地形については、調査区中央に入江状の低地があり、本来、流路というよりも、低湿地であったと考えられる。土層  $1\sim5$  は重機などを使用して低地を埋め戻した際に形成された人為的な堆積層で、土層 1 は礫を含む埋め戻し土で、他所から持ち込まれた土砂が整地のために投入された可能性がある。土層 6 は土層  $1\sim5$  形成以前の耕作土である。

#### (3) 2-2調査区(図16~17、写真8~9)

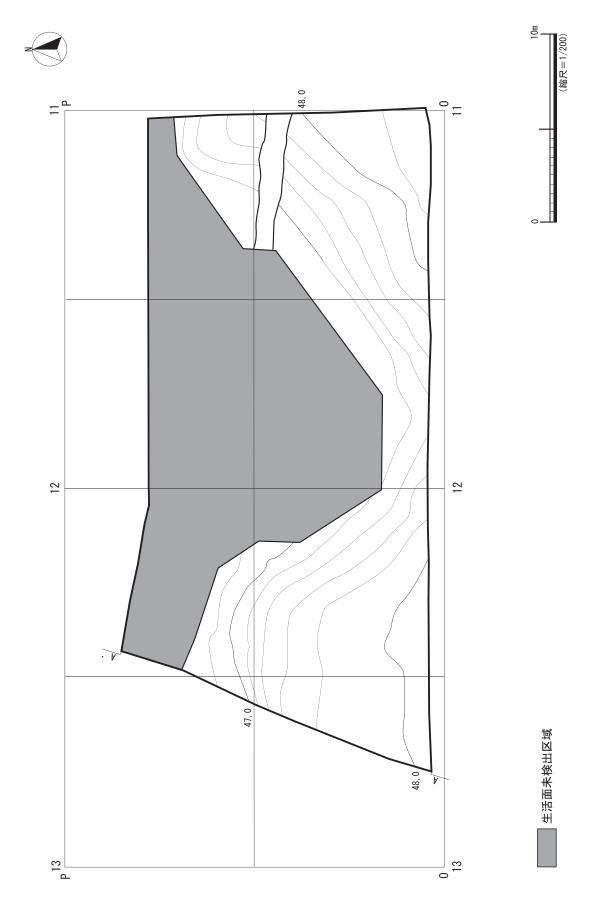
第3調査区の北西に位置し、用水路を挟んで第3調査区に隣接する。用水路に沿って用水路の南西側に調査区を設置した。用水路に沿って流路が検出された。この流路は農地造成によって埋め戻されており、埋戻しによる人為堆積層を除去したところで、遺構確認、地形測量を行った。

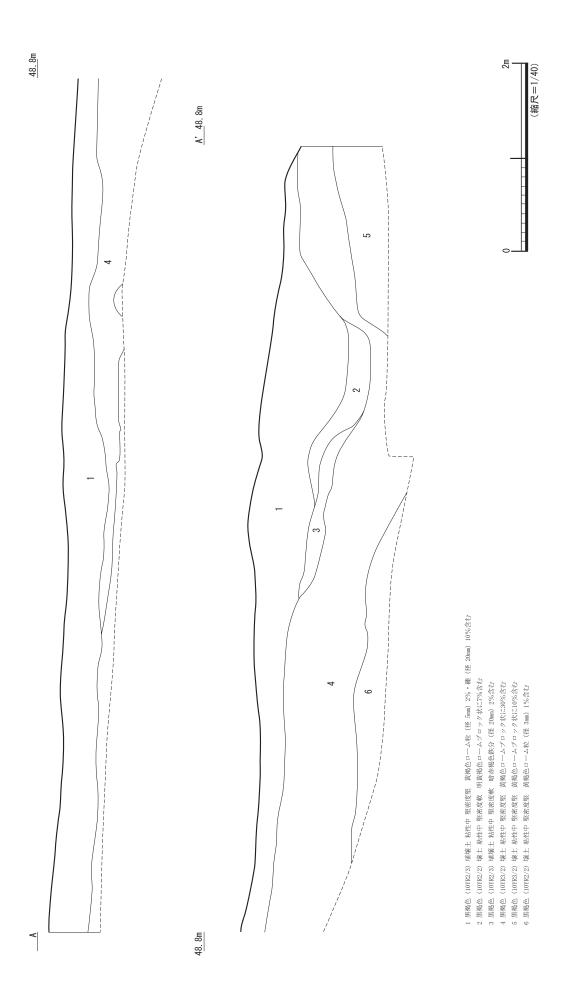
**地形**: 南東から北西に向かって緩やかに傾斜する。流路の幅は調査区壁から測って  $4 \sim 6$  m、現況水路が幅約2 mであることから、当初は幅 $6 \sim 8$  mの流路であったと推測できる。人為堆積層除去後の流路底面の深さは現地表面から約0.7mである。

遺構等:確認できない。

土層: 図17A-A' 土層  $1 \sim 4$ 、 6 、  $8 \sim 11$ は黄褐色ローム粒を多く含む黒褐色土、土層 5 、 7 は黄褐色土主体、土層 $12 \sim 14$ は混入物のない土層である。土層 $12 \sim 13$ は基本層序II-1層に相当し、土層12は土層13が酸化したものである。土層14は基本層序II-2層に相当する。土層12は花粉分析試料120、土層13は花粉分析試料120、土層13は花粉分析試料120、土層13は花粉分析試料120、土層13は花粉分析試料120、土層13は花粉分析試料120、土層13は花粉分析試料120、土層13は花粉分析試料140、土層14は火山灰試料140、八月の採取層位である。

考察: 土層 1 は旧耕作土、土層 2~11は流路の埋戻しによる自然堆積層である。土層12、13上面が流路埋戻し以前の生活面である。火山灰分析の結果、土層14は1694年降灰の駒ケ岳C2テフラ(Ko-C2)と同定されていることから(第V章第 1 節参照)、館城築城期の生活面は土層12~13中と推定できる。





28

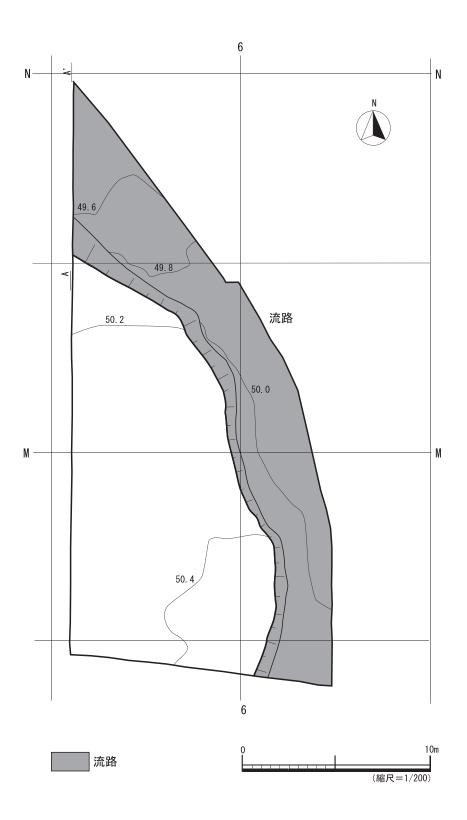


図16 2-2調査区遺構配置図

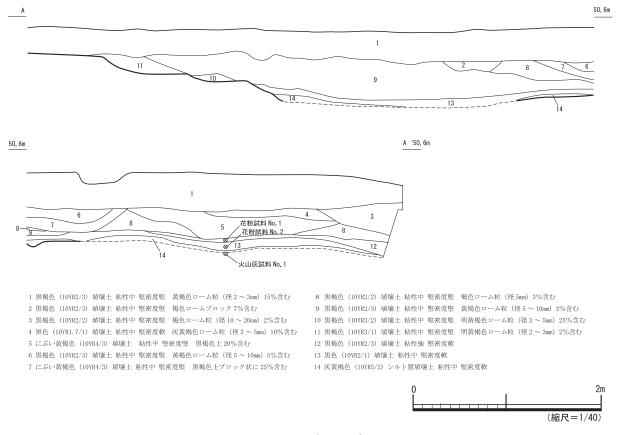


図17 2-2調査区西壁断面図

# 3. 第3調査区(図18~23、写真10~12)

#### (1)調査区の概要(図18、写真10)

平成20年度調査区において検出した柵列の延長及び整地層の範囲を確認することを目的として、 平成20年度調査区の南西に調査区を設定した。調査区西側には、第2調査区へ続く用水路が南北方 向に延びる。調査区内の北側には南東から北西方向に延びる沢状地形があり、この沢状地形も調査範囲 に加え、地形測量等を行った。平成20年度に検出した柵列(SA2)の延長上で「溝状遺構」を検出した ことから、調査区東壁に東西2m、南北3mのサブトレンチを設定し、「溝状遺構」の断面確認を行った。

# (2) 「溝状遺構」(図18、19、23、写真12)

規模・形状:検出面での幅約0.3m、検出面からの深さ0.4mである。坑底はほぼ平らで壁は内湾気味にほぼ垂直に立ち上がり、開口部付近で外反する。柱痕は確認できない。また、掘込も不明瞭である。 方位:N-89°-W

**土層**: 図23 B - B' 土層  $1 \sim 2$  は均質で混入物の少ない黒色土、土層  $3 \sim 13$ は灰黄褐色土を主体として、黄橙色火山灰粒や黒褐色土を含む。堅密度はいずれも高い。土層 $14 \sim 17$ は混入物のない均質な土壌である。土層 $14 \sim 17$ は平坦ではなく、北側が盛り上がっているが、特に人為的なものではなく、自然地形と考えられる。

考察: 土層 1 ~ 2 は「溝状遺構」の埋土である。平面、断面ともに柱痕が確認されなかったことから、柵列とは断定できないが、平成20年度調査区において検出した柵列(SA2)の延長上に位置し、規模、形状、方位が一致することから、何らかの区画施設と判断したい。掘方の掘込が不明瞭であることから、整地層上面から掘込まれたのではなく、整地層構築と同時に柵などの構造物を設置した可能性もある。構築の具体的な方法は明らかにできなかった。

### (3)整地層(図18~23、写真10)

規模・形状:整地層の広がりについては、平成20年度、21年度ともに東側及び南側の範囲が検出されていない。整地層の西端については、第2調査区へ続く流路の上端に一致し、北側では、「沢状地形」の上端に一致する。整地層の上端から西側の用水路底面、北側の「沢状地形」底面までの比高差は約1.5m、斜度は約45°で、徒歩による昇降は困難である。整地層の厚さは約0.7mである。整地層の上面はほぼ平らである。整地層周辺の旧地形は、南東から北東へ5~6%の下り勾配と推測でき、整地層によってこの下り勾配が解消されてほぼ水平な平坦面が造成されている。

#### **土層**:(2) 「溝状遺構」の項で詳述

考察:土層1~2は「溝状遺構」の埋土、土層3~13は整地層を構成する堆積土である。土層14は基本層序II-1層相当、土層15は基本層序II-2層相当、土層16は基本層序II-3層相当、土層17は基本層序II-4層相当である。整地層を構成する土層3~13はIII層起源の灰黄褐色シルト質壌土を主体とし、周辺の自然堆積層と比較して堅密度が高いことから、締りのある土壌の選別、填圧などの作業により地盤整備を行ったものと推測する。なお、平成20年度の調査区において検出した焼土層や炭化米は、焼土層がわずかに検出できたのみである。柱穴や礎石など建物の存在を示す遺構は確認できなかった。整地層の西側、北側には流路、「沢状地形」などの自然地形が所在し、これらの自然地形を効果的に利用して周辺と比高差を確保したものと考えられる。

# (4) 「沢状地形」(図18~23、写真11)

規模・形状:調査前はヨシやササが繁茂しており、地形が判然としなかったことから、楕円形のく ぼみ状の地形と考えていたが、除草後、沢状の地形であることが判明した。幅約5m、現地表面から の深さ約1.2mである。調査区外北西で第3調査区西側を第2調査区方向へ流れる用水路に合流する。 底面はほぼ平らで、内湾気味に立ち上がる。傾斜角は南側で約45°、北側で約25°である。

**方位**: N-61°-W

考察:平面形が方形に近いことから、人為的に掘削された溝状の遺構である可能性も考えたが、堀・柵列、整地層などと方位が一致せず、平成20年度調査区で検出された沢状地形と同様に南東—北西方位をとることから、自然地形の可能性が高いと判断した。整地層の北縁が沢状地形の上端に一致することから、自然地形を意識して整地層の構築がなされたことが伺える。

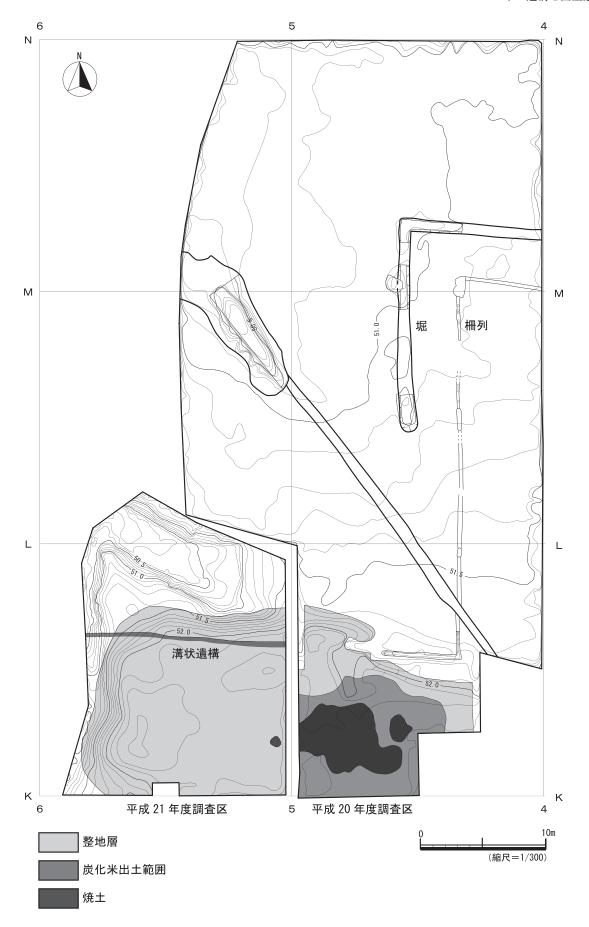


図18 第3調査区全体遺構配置図

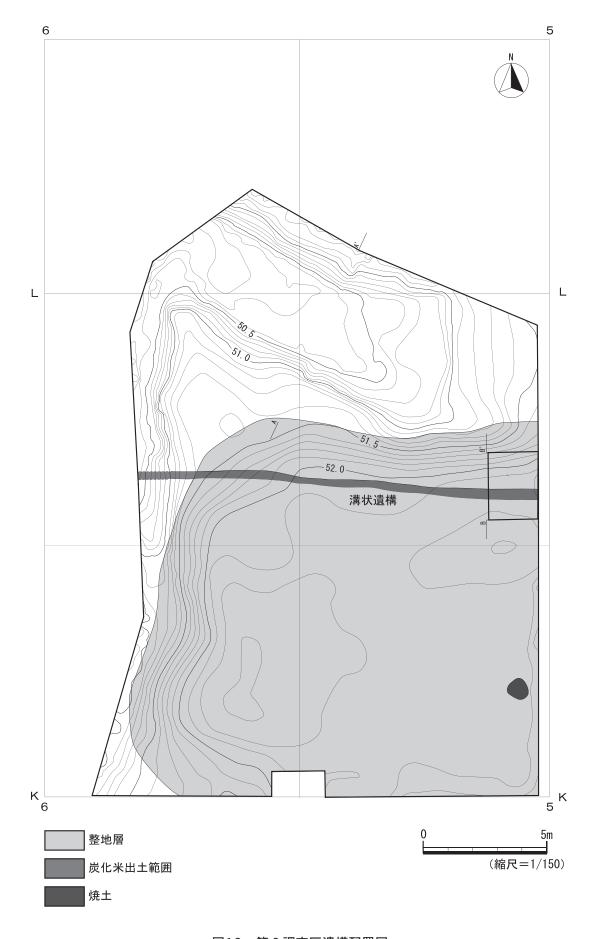


図19 第3調査区遺構配置図



図20 平成20・21年度第3調査区3次元現況地形図



図21 平成21年度第3調査区3次元現況地形図(北西から)

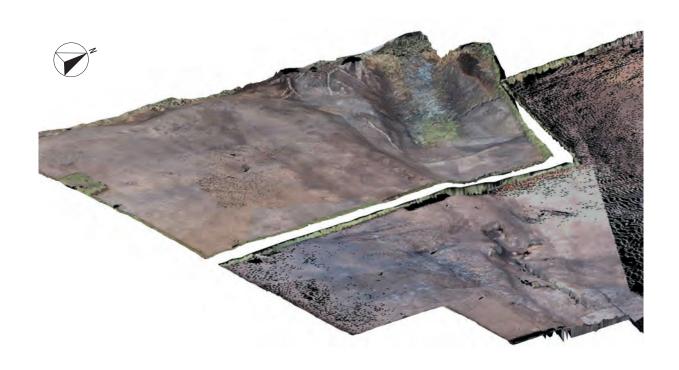
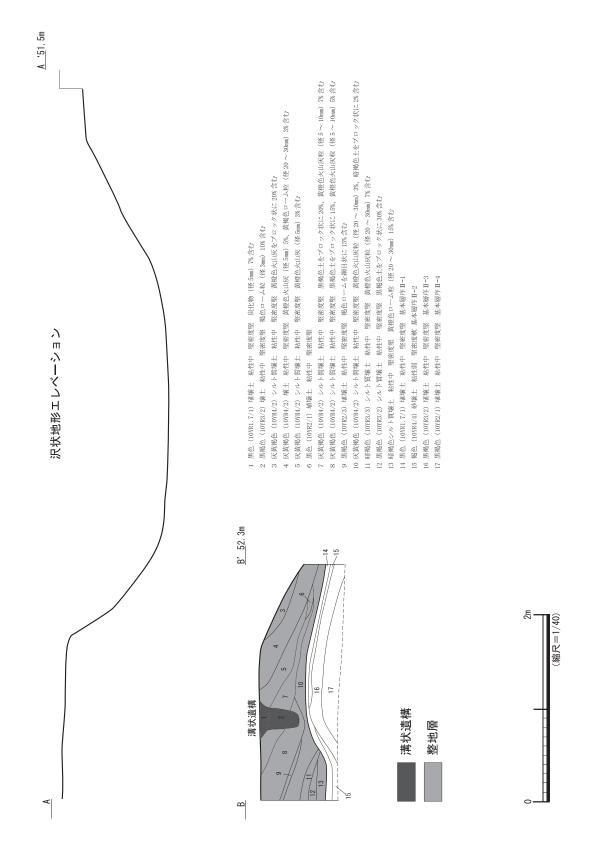


図22 平成21年度第3調査区3次元現況地形図(南東から)





# 4. 第4調査区 (図24~29、写真13~18)

#### (1)調査区の概要(図24)

平成20年度第1調査区の成果とあわせて報告する。平成20年度の調査区は分岐した堀の西側が現況水路につながっていることから、この水路と堀との関係を確認することを目的として西側の調査区を設定した。平成19年度の調査により、現況水路とは別に現況の堀の延長上で北西方向に延びる堀を確認していたが、平成20年度の調査では、より直接的に堀と現況水路との関係を確認することとした。

平成20年度東側の調査区では、堀・土塁・柵列が良好に残存する箇所を選定し、館城跡の外郭線を構成する遺構の位置関係を確認することとした。平成20年度の調査の結果、堀・土塁・柵列が良好に残存することを確認したが、あわせて平成20年度調査区の南北に所在する堀・土塁の屈曲部における柵列の位置関係についても確認することとした。このことから、平成21年度は、平成20年度調査区の南北に調査区を設置し、屈曲部における堀・土塁・柵列の位置関係確認を行うこととした。

なお、図25~29のコンターは0.1m間隔である。

#### (2) 平成20年度西側調査区(図25、写真13)

掘削対象は表土のみとし、土塁・堀への掘削は行っていない。堀及び現況水路は常に流水している ことから、掘削を断念し平面でのみ切り合い関係を確認した。

規模・形状: 土塁は検出面の基底部で幅約3m、検出面からの比高差は約0.4mである。堀の幅は検出面の開口部で約1.6m、現況の坑底で約0.2mである。現況水路は土塁が途切れるあたりで南寄りに方位を変え、西へのびる。堀は角度を変えず北西へ延び、平成19年度調査区で検出した堀(SD2)へとつながる。現況水路は堀の埋土を切って西へ延びる。

方位: 土塁は検出範囲が狭いことから算出しない。堀はN-56°-W、現況水路はN-77°-Wである。

**考察**:堀の埋土を切っていることから、現況水路は館城跡の堀が埋没した後に掘削されたと判断できる

# (3) 平成20·21年度柵列(図26~29、写真14~18)

表土及び耕作土除去後、土塁及び柵列の検出を行った。柵列は掘方全体を約10cm掘り下げ、柱痕の検出を行った。図28では土塁基底部が柵列を覆っていたが、柵列柱痕を土塁基底部上で確認することができた。

規模・形状:掘方開口部の幅は検出面で約0.3m、深さ0.4mである。坑底は平らで、これまでのところ柱の打ち込まれた痕跡は確認できない。壁はほぼ垂直に直線的に立ち上がる。柱痕の検出面開口部の直径は小さいもので0.1m、大きいもので0.15mである。平面形は円形又は楕円形で、円形が多い。堀・土塁と並行し、2箇所で屈曲する。図26では約1mの開口部を確認した。

**方位**:北側ではN-82°-W、南北の屈曲間でN-10°-W、南側でN-71°-W、図29東端で再度方位を変えている可能性があるが計測不能。

土層:図28A-A'土層 1 は軟質の黒褐色土、 2 は締りのある黄橙色土、  $3\sim4$  は比較的締りのある黒褐色土、  $5\sim7$  は締まりのない黒褐色土で褐色~明黄褐色土をブロック状に含む。

考察:屈曲部においても、柵列が堀・土塁と並行することが確かめられた。柵列掘方を埋めるように 堆積する土塁基底部上で柱痕を検出できたことから、柵列構築後、柵列の基部が消失する以前の期間 に土塁崩落土などにより柵列基部が覆われたものと推測する。図28A-A'土層1は柵列柱痕、土層2は土塁の構成土の一部、土層 $3\sim7$ は掘方の埋め戻し土で、下位層ほど軟質となる。なお、平成20年度調査区で検出した柵列柱痕の残存木材2点の樹種同定の結果は、試料No.1(写真17)が二レ属、試料No.2がカエデ属と同定されている。

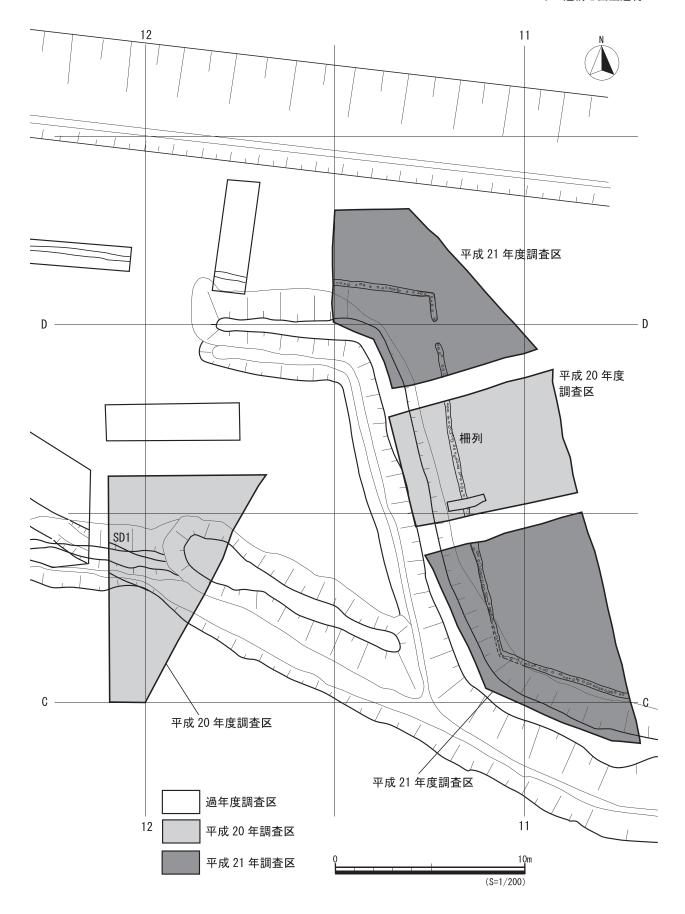


図24 第4調査区全体遺構配置図

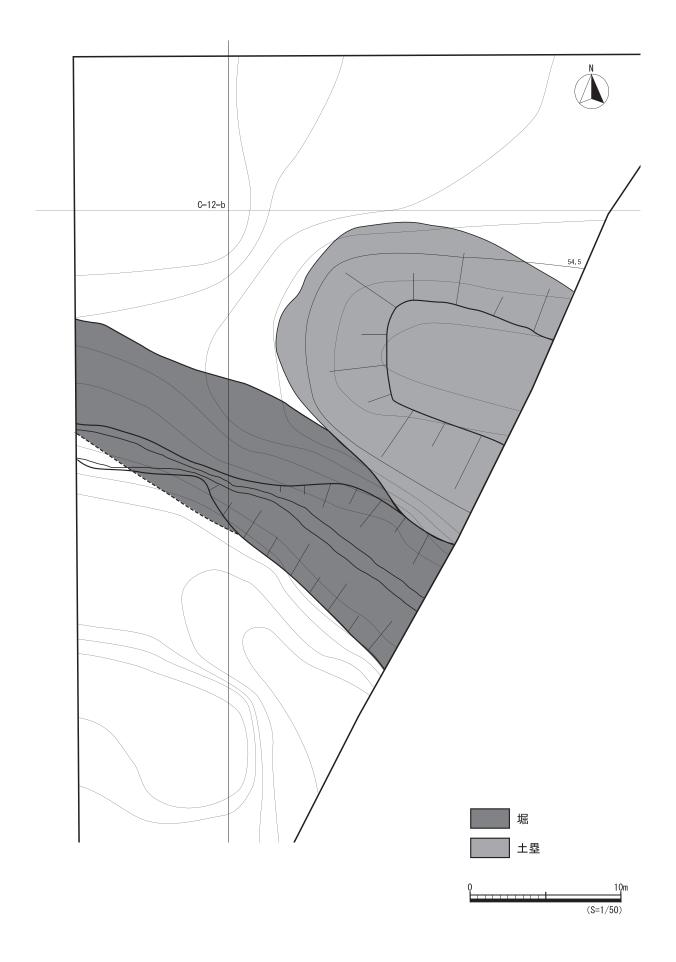


図25 第4調査区平成20年度西側調査区平面図

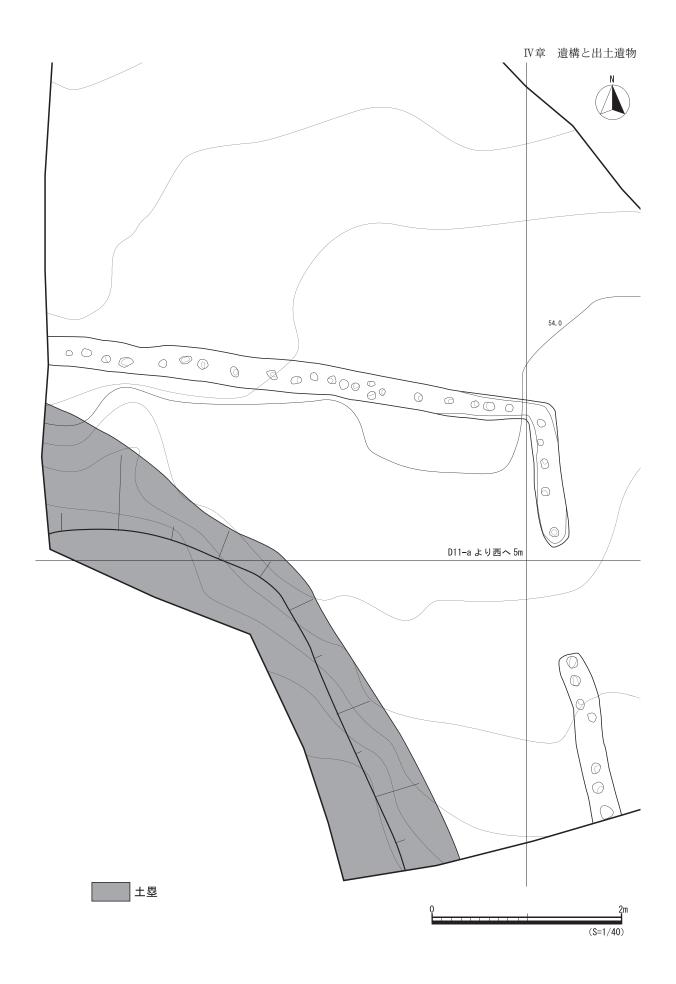


図26 第4調査区柵列平面図(1)



図27 第4調査区柵列平面図(2)



図28 第4調査区柵列平面図(3)

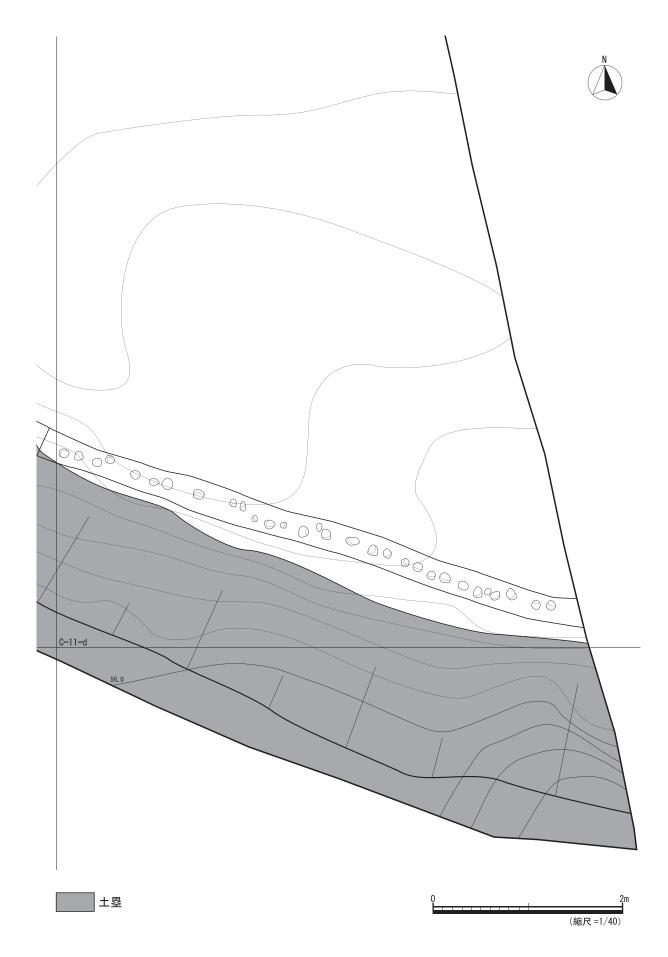


図29 第4調査区柵列平面図(4)

# 5. 第5調査区(図30~34、付図1、2、写真19~21)

#### (1)調査区の概要(図1、図30)

館城跡の旧町有地(字城丘160、168-1、168-3)には礎石が残存することが知られており、これまでにも昭和39年、平成2年に配置確認調査が実施されてきた。また、江差町増田家が所有していた『増田家文書』中に「館築城圖」とされる建物図面があることが知られていたが、「現存する礎石の配置とは一致しない」とされてきた(厚沢部町教育委員会1989)。最後に行われた配置確認調査から20年が経過していることから、改めて礎石の残存状況を確認することを目的として調査を行った。

礎石の検出にはピンポールによる所在確認の後、礎石確認位置周辺の除草により検出した。地下への掘削は行っていない。

#### (2) 礎石建物の概要(図30)

3棟の建物を復元し、「本丸建物1」、「本丸建物2」、「米倉建物」と仮称した。建物名称については、地域住民の呼称を踏襲したもので、建物の機能を意味しない。「本丸建物1」及び「本丸建物2」は隣接して位置することから、関連性の高い一連の建物であろう。「米倉建物」は、「本丸建物1」及び「本丸建物2」より一段低い平坦面に立地していることから、これらとは性格が大きく異なる建物と推測する。いずれの建物も柱間寸法の基準は6尺(約1.8m)である。

礎石の石質は、目視で確認した限りでは凝灰岩である。礎石表面は赤変し、薄い剥離が多く認められ、被熱の痕跡と判断した。

# (3) 「米倉建物」(図31、写真19)

規模・形状:南北に長軸をとり、桁行13間、梁行5間である。南面には半間の張り出しが付き、東面の南半にも同様の張り出しが付く。中央は1間幅で通路上に柱筋が通り、その左右(東西)にそれぞれ $6\sim7$ 間の「部屋」が配置される。

**方位**: N-3°-E

出土遺物:出土遺物の多くは東面の側柱に沿って出土した。器種は碗、段重、蓋付き鉢、すり鉢などである。

#### (4)「本丸建物1」(図32、34、写真21)

規模・形状:南北に長軸をとる。南側は道路敷地へと延びており、南端を確認することはできなかった。桁行は確認できる限り27間、梁行5間半である。南側では梁行が3間半となるが、礎石を検出しきれなかった可能性もある。建物中央には1間幅の通路上に柱筋が通り、建物北端から12間半のところ(Fライン付近)で半間西に筋を変える。通路の左右は2間四方ないし、長軸2間半短軸2間規模の部屋が並ぶ。西面の側柱筋に中心を置いて井戸跡がある。井戸跡の掘削は行っていない。

**方位**:N- 5°-E

出土遺物:建物北側で多く出土している。器種は碗、碗蓋、合子蓋、急須、灯明皿、屏風側面金具などが出土した。

#### (5) 「本丸建物 2」(図33、34、写真20)

規模・形状:未検出の礎石が多く、建物全体の構造を把握し得ない。「本丸建物1」とは約5間(約9m)の距離があり、この間、礎石は確認されていない。建物はコの字型、又は回廊状となり、中庭を有する構造である可能性が考えられる。北側については、Gライン付近まで延びると考えられるが、まとまった礎石配置は確認できない。南端は、半間の張り出しが付く。

**方位**:N-5°-E

出土遺物:皿が1点出土している。

#### (6) 『増田家文書』「館築城圖」との比較(図34、写真1)

掲載図は現地の礎石配置にあわせて、一棟の建物として描かれた図面を分割して掲載している。

「本丸建物 1」に重ねた右半の建物には、「御寝所御居間」、「奥様御居間」などがあり、「本丸建物 2」へつながる「御次」と「奥基子」との間に「御錠口」がみえることから、「奥御殿」相当する建物と考えられる。「本丸建物 2」に重ねた左半の建物には、「御逢之間」があり、「御料理之間」やこれから「御逢之間」をつなぐ「召上物御通廊下」などがみえることから、城主の日常空間である「常御殿」に相当する建物と考えられる。「御逢之間」から、「御次」、「鷲之間」を経由して左手に延びる廊下には「御出座廊下 此通ヨリ御入側金ノ間夫ヨリ大広間江通ス」とあることから、「御出座廊下」を経て、左手(西側)にはさらに「金ノ間」、「大広間」などを含む建物が存在した可能性が考えられる。おそらく、「表御殿」に相当する建物であろう。

「本丸建物 1」に相当する右半の建物は、検出した礎石配置と比較して、梁行で半間広いほか、いくつかの点で違いが見られるが、基本的な構造については一致しているとみることができる。また、礎石建物中央の通路状の通りを基準に図面を合わせた場合、東側に半間張り出す部分は「縁側」(くれ縁)として描かれていることから、母屋とは異なる基礎構造があったため、礎石が検出されなかった可能性も考えられる。

建物中央左側には「玄関奥御門」があり、これを挟んで上側(北側)では「老中格女中」、「御抱御乳部屋」、「御末女中部屋」などがみえることから、城主とその家族、身の回りの世話をする女性の居住空間であったことが分る。「玄関奥御門」の下側(南側)では南から「御寝所御居間」、「奥様御居間」、「 「若殿様御居間」が並び、城主とその家族の居住空間が描かれる。

また、風呂は4箇所描かれ、城主、奥方、若殿はそれぞれひとつずつ「御湯殿」が割り当てられ、 女中連中は「女中風呂場」が割り当てられていたようである。

「本丸建物 2」に相当する左半の建物は、礎石の検出が不十分なことから現段階で評価することは難しい。「御出座廊下」と「諸役人通廊下」との間の中庭的な空間が類似すること、北西方向へ延びる構造などに類似点がある。

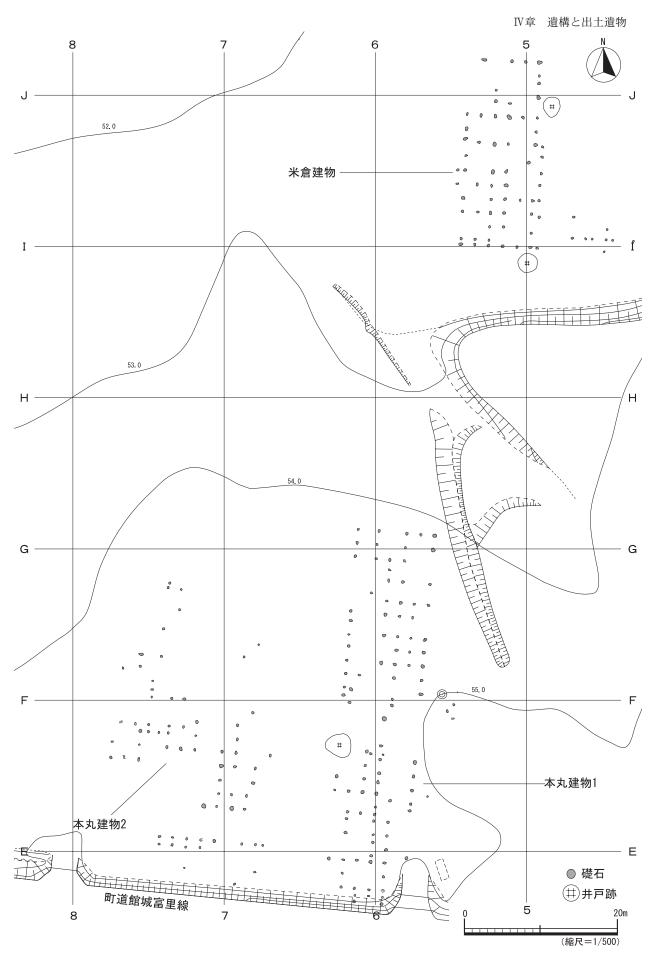


図30 第5調査区礎石建物配置全体図

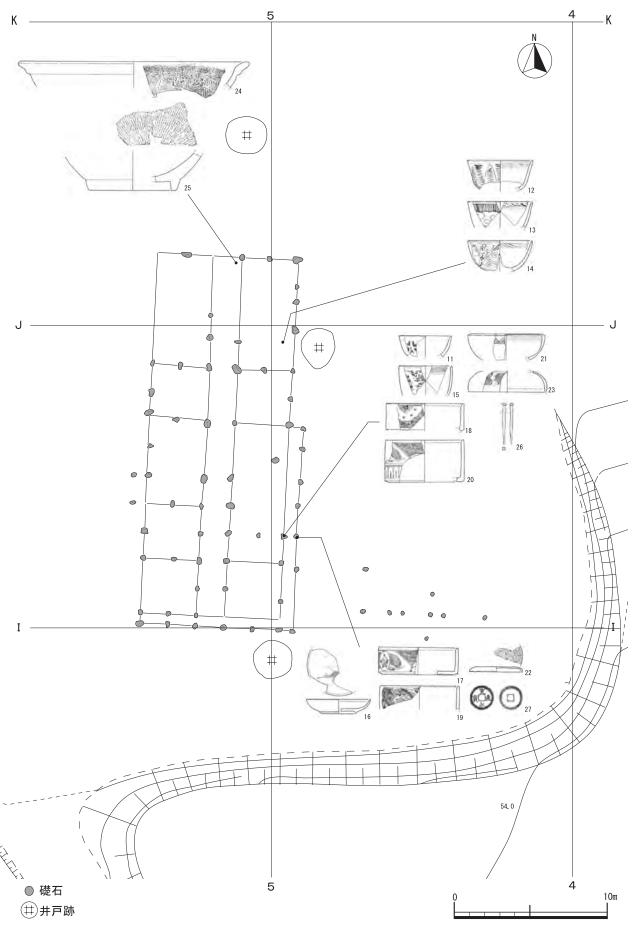


図31 第5調査区「米倉建物」平面図

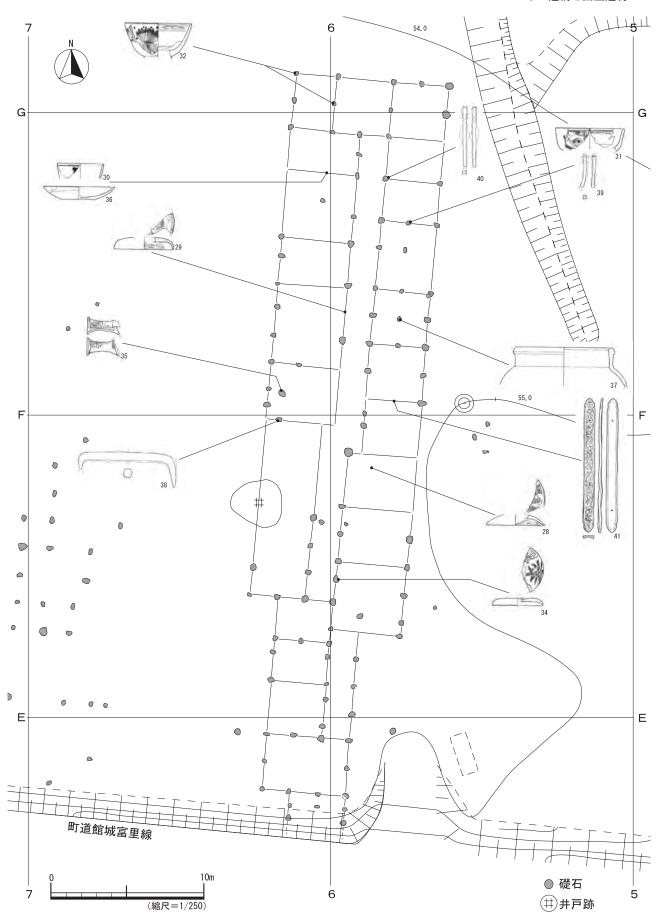


図32 第5調査区「本丸建物1」平面図

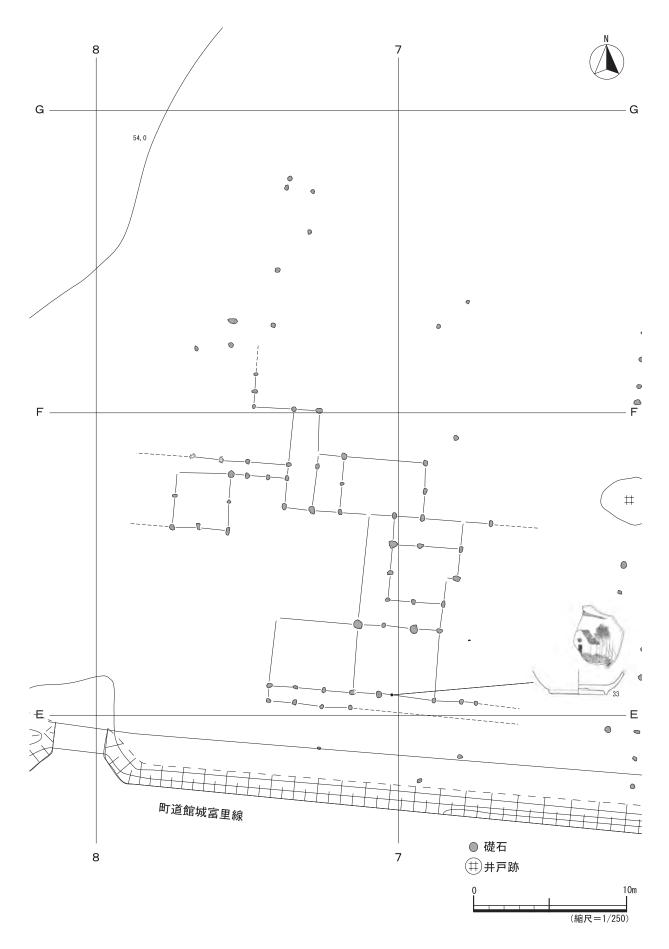


図33 第5調査区「本丸建物2」平面図

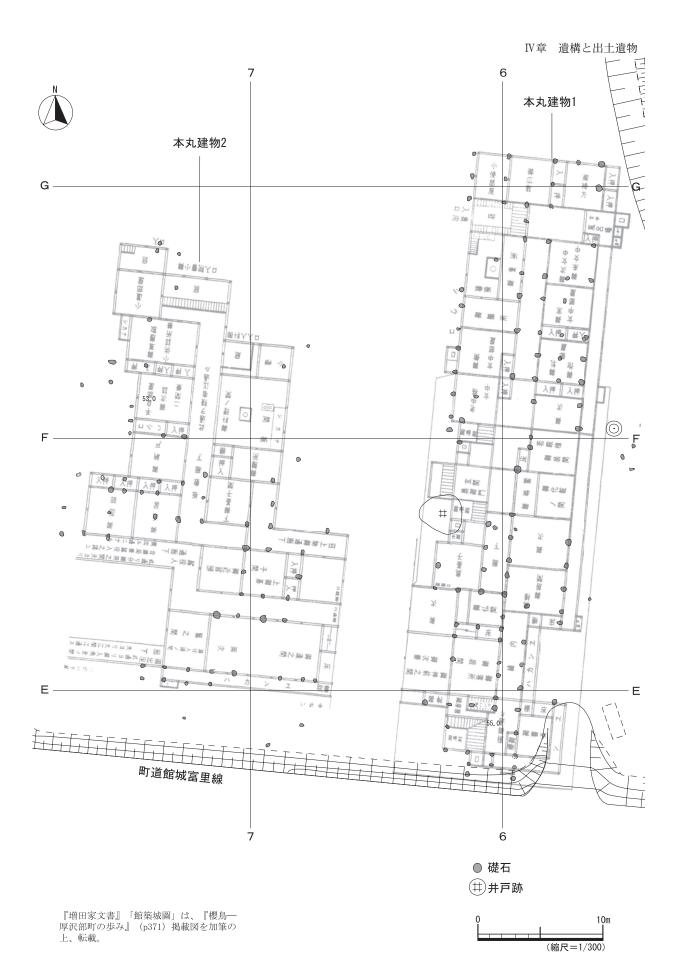


図34 第5調査区礎石建物『増田家文書』「館築城圖」との比較

#### 6. 遺構出土遺物及び包含層出土遺物 (図35~37、写真22~26)

# (1) 平成20年度第4調査区出土遺物(図35、写真22)

1~5は全て磁器である。

1 は碗蓋で外面に草花文、内面に「造」字がみえる。  $2 \sim 3$  は碗で、 2 は外面草花文、見込みに圏線が施される。 3 は外面草花文、見込みに圏線を施す。  $4 \sim 5$  は皿で、高台内を蛇目状に露胎し、見込みに山水が描かれる。

# (2) 第2-1、2-2調査区出土遺物(図35、写真23)

6~7は全て磁器である。

6は碗蓋で、内面見込に圏線を施し、内側に省略された山水風の図柄を描く。7は碗で外面は花文と波、口縁部内面に雷文を施す。8は波佐見産のいわゆる「笹徳利」である。

#### (3) 第3調査区出土遺物(図35、写真24)

9は用途不明の筒状の銅製金具である。外面は六角柱状に面取され、内部は円筒状である。

# (4) 平成21年度第4調査区出土遺物(図35、写真24)

10は鉄製の釘である。釘頭は板状である。

#### (5) 第5調査区「米倉建物」採集遺物(図36、写真25)

11~23は磁器、24~25は陶器である。

11~15は碗である。11は外面に桜花文を施す。12は外面に草葉文、口縁部内面に連続する短直線を施す。13は外面に縦縞と唐草文、口縁部内面に連弧文を施す。14は外面に花文と窓、口縁部内面に檜垣文を施す。15は筒型に近い丸碗で、外面に花唐草文、口縁部内面に雷文を施す。16は丸皿で、見込には山水と思われる図柄が描かれる。17~20は段重である。17と20は対となる個体で、17が中段、20が基段である。17、20に描かれる図柄は共通で、外面は斜線で区画され、雲文と花唐草文が描かれ、窓内に花文が施される。加えて20では外面下位に方形の中に縦棒を引く連続文が施される。18は段重の中段で、外面に半菊花風の花文が施される。19は外面に草花文と花弁が描かれる。21~22は合子で、22が身、22~23が蓋で、21と23は対となる個体である。21、23は口縁部外面に連続する花文がめぐる。22は外面に微塵唐草紋が施される。

24~25は同一個体の陶器製すり鉢である。口縁端部は折り返されて肥厚する。内外面とも銹釉が施される。卸目は上位で浅く不明瞭となる。

26は釘で、釘頭は薄く幕ように折り曲げられる。27は寛永通宝で、「寶」字の「貝」が「ハ字」となっていることから、寛文8 (1668) 年以降鋳造の、いわゆる「新寛永通宝」である。

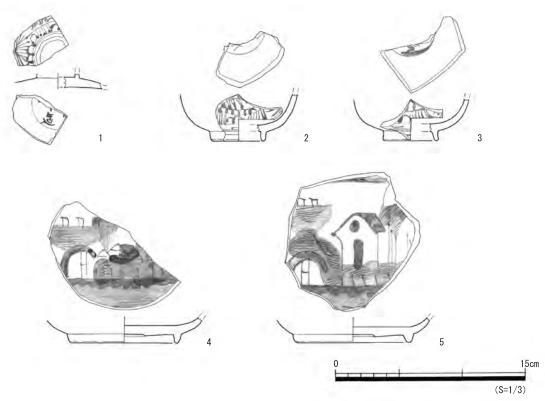
# (6) 第5調査区「本丸建物」採集遺物(図37、写真26)

28~35は磁器、36~37は関西系陶器、38~41は金属製品である。

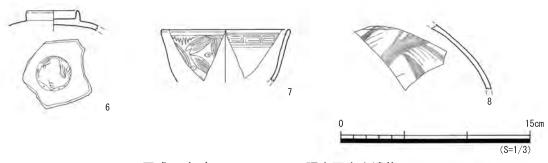
28~29は碗蓋で、28は外面に草葉文、口縁部内面に連続する短直線が施される。29は外面に山水、口縁部内面に檜垣文を施す。30は丸碗である。31~32は端反碗で、31は外面に草花文、口縁部内面は連続する圏線が施される。32は外面に草花文、口縁部内面に連続する鋸歯状文が施される。33は皿で、高台内を蛇目状に露胎し、見込みに山水が描かれる。34は合子蓋で、外面に花文と「壽」の文字が描かれる。35は急須取手で蛸唐草文と青海波が描かれる。

36は灯明皿の受皿で、内面及び口縁部外面は灰釉が施され、外面体部下位と底部は露胎となる。37は信楽の壺で、口縁は折り返されて玉縁状となる。外面と口縁部内面に施釉され、内面は露胎となる。

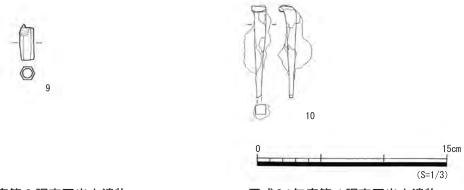
38は鎹である。 $39\sim40$ は釘で、釘頭を巻くように折り曲げるものである。41は銅製の屛風平金具で、表面には毛彫の花唐草文が施される。2箇所に目釘孔がある。



平成20年度第4調査区出土遺物



平成21年度2-1・2-2調査区出土遺物



平成21年度第3調査区出土遺物

平成21年度第4調査区出土遺物

図35 第1調査区~第4調査区出土遺物

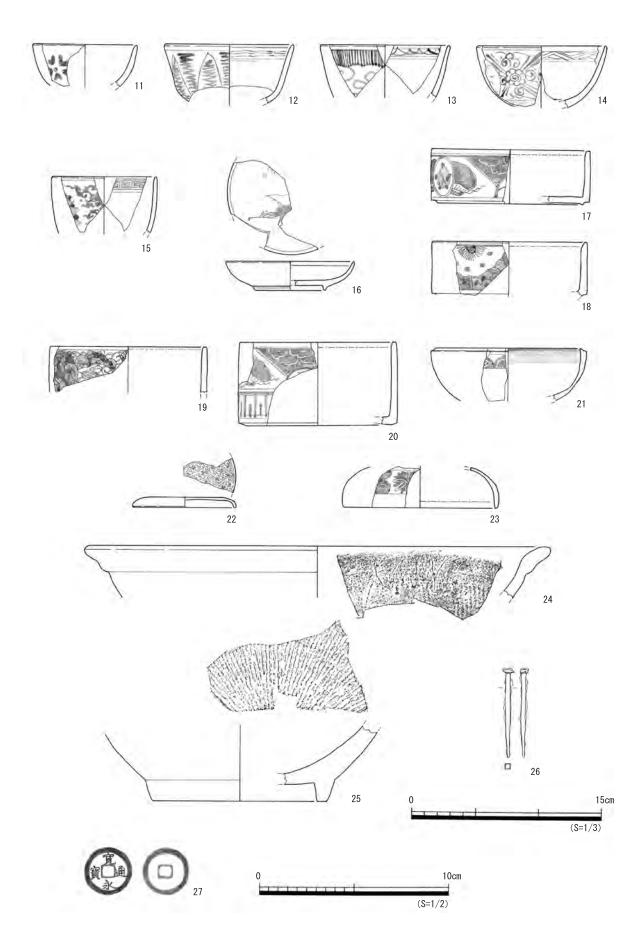


図36 第5調査区「米倉建物」採集遺物

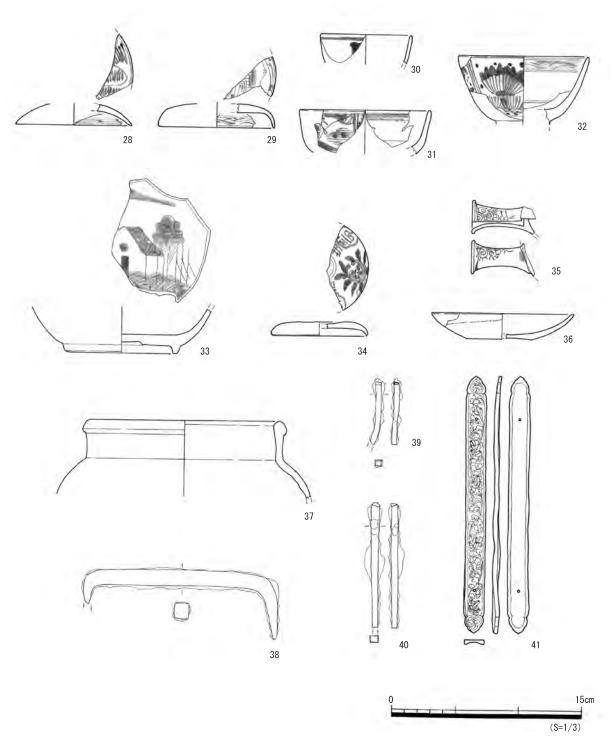


図37 第5調査区「本丸建物」採集遺物

表 4 掲載遺物一覧(陶磁器)

掲載番号	写真	調査区	グリッド	層位	種類	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備考
1	22	第4調査区H20	C-11-c	I 層	磁器	碗蓋				外面草花文、内面「造」字
2	22	第4調査区H20	C-11-b	I層	磁器	碗		4.0		外面草花文、見込圏線
3	22	第4調査区H20	C-11-c	表採	磁器	碗		4.0		外面草花文、見込圏線
4	22	第4調査区H20	C-11-c	表採	磁器	Ш		8.4		高台内蛇目状に露胎、見込 に山水
5	22	第4調査区H20	C-11-a	II層	磁器	Ш		8.4		高台内蛇目状に露胎、見込 に山水
6	23	2-2調査区	M-6-b	I層	磁器	碗蓋		3.9		見込圏線内側に山水風の波 と遠山
7	23	2-1調査区	O-11-a	I層	磁器	碗		10.0		外面花文と波、口縁内面雷文
8	23	2-2調査区	M-6-b	I層	磁器	瓶				外面笹文
11	25	第5調査区	米倉建物	表採	磁器	碗	8.0			外面桜花文
12	25	第5調査区	米倉建物	表採	磁器	碗	11.0			外面草葉文、内面口縁連続 短直線
13	25	第5調査区	米倉建物	表採	磁器	碗	10.0			外面縦縞と唐草文、内面口 縁連弧文
14	25	第5調査区	米倉建物	表採	磁器	碗	10.0			外面花文と窓、内面口縁檜 垣文
15	25	第5調査区	米倉建物	表採	磁器	碗	8.0			外面花唐草、内面口縁雷文
16	25	第5調査区	米倉建物	表採	磁器	Ш	10.0	6.0	2.0	見込山水?
17	25	第5調査区	米倉建物	表採	磁器	段重	12.0	12.0	4.4	外面区画して雲文と花唐草、 窓内花文
18	25	第5調査区	米倉建物	表採	磁器	段重	12.0	12.0	4.2	外面半菊花風花弁
19	25	第5調査区	米倉建物	表採	磁器	段重	12.0	12.0		外面草花文と花弁
20	25	第5調査区	米倉建物	表採	磁器	段重	12.0	12.0	6.5	外面区画して雲文と花唐草、 窓内花文、外面下位棒状連続文
21	25	第5調査区	米倉建物	表採	磁器	合子	12.0			外面口縁連続する花文
22	25	第5調査区	米倉建物	表採	磁器	合子	8.0			外面微塵唐草文
23	25	第5調査区	米倉建物	表採	磁器	合子蓋	12.0			外面口縁連続する花文
24	25	第5調査区	米倉建物	表採	陶器	すり鉢	36.0			
25	25	第5調査区	米倉建物	表採	陶器	すり鉢		13.0		
28	26	第5調査区	本丸建物	表採	磁器	碗蓋	9.0			外面草葉文、内面口縁連続 短直線
29	26	第5調査区	本丸建物	表採	磁器	碗蓋	9.0			外面山水、内面口縁檜垣文
30	26	第5調査区	本丸建物	表採	磁器	碗	7.0			
31	26	第5調査区	本丸建物	表採	磁器	碗	10.0			外面草花文、口縁圏線
32	26	第5調査区	本丸建物	表採	磁器	碗	10.0			外面草花文、内面口縁鋸歯 状文
33	26	第5調査区	本丸建物	表採	磁器	Ш		8.0		高台内蛇目状に露胎、見込 に山水
34	26	第5調査区	本丸建物	表採	磁器	合子蓋	7.5			外面花文と「壽」字
35	26	第5調査区	本丸建物	表採	磁器	急須				外面蛸唐草文と青海波
36	26	第5調査区	本丸建物	表採	関西系陶器	灯明皿	11.0			
37	26	第5調査区	本丸建物	表採	関西系陶器	壺	15.0			口縁折返玉縁状

# 表 5 掲載遺物一覧(金属製品)

掲載番号	写真	グリッド	層位	種類	器種	長 さ (cm)	幅 (cm)	厚 さ (cm)	備考
9	24	K-5-b	整地層	金属製品	不明		1.1	1.1	毛彫草花
10	24	D-11-a	I層	鉄製品	釘	7.2	2 0.9 0.8		
26	25	米倉建物	表採	鉄製品	釘	7.0	0.5	0.4	
35	25	米倉建物	表採	銭	寛永通宝	2.5	2.5	0.1	新寛永通宝
38	26	本丸建物	表採	鉄製品	鎹	15.9	1.5	1.2	
39	26	本丸建物	表採	鉄製品	釘		0.6	0.4	
40	26	本丸建物	表採	鉄製品	釘		0.6	0.6	
41	26	本丸建物	表採	金属製品	屏風平金具	20.2	1.6	0.3	毛彫花唐草文

表 6 平成21年度出土遺物集計表

種別	器種	法量	点数
滋器	<u> </u>		232
	碗蓋		22
	碗	•	61
		6cm	1
		8cm	3
		10cm	9
		12cm	8
		不明	40
	筒型碗		1
	Ш		22
	輪花皿		22
	鉢		3
	段重		29
	合子蓋		7
	合子		1
	蓋類		6
	急須		1
	花瓶		1
	香炉		6
	瓶		19
	不明		31
関西系陶器			57
	土瓶		20
	灯明皿		6
	鉢		14
	瓶		4
	壺		9
	不明		4
<b>海</b> 器			32
	すり鉢		24
	甕		6
	不明		2
金属製品	•		12
	釘		7
	鎹		1
	その他		1
	不明		3
<b></b>			1
	寛永通宝		1
上製品			83
	珪藻土		76
	不明		7
丘代磁器			59
	碗		26
	Ш		30
	瓶		2
	不明		1
その他			14
	ガラス		12
	フレイク		2
総計			490

# V章 自然科学的分析

#### 1 厚沢部町館城跡のテフラ分析

藤根 久 (パレオ・ラボ)

# (1) はじめに

館城跡の調査では、自然流路が確認され、土層中からテフラが検出された。ここでは、このテフラ 層について鉱物組成およびガラスの屈折率測定を行い、テフラの同定を行った。

#### (2) 試料と分析方法

試料は、自然流路の土層14(基本層序Ⅱ-2層)から採取されたテフラ層1試料である(表 1)。 分析は、鉱物組成の分析と火山ガラスの屈折率測定を行った。以下に、その分析方法を示す。

#### 表 1 テフラ分析を行った試料とその詳細

試料No.	位 置	層 位	特徵	備考 (調査所見)
1	自然流路	土層14(基本層序Ⅱ-2層)	軽石混じり黒褐色砂質粘土(10YR 3/2)	B-Tm または Ko-C <sub>2</sub>

#### a. 鉱物組成

各テフラ試料は、自然含水状態で約40g程度秤量し、 $1\phi$  (0.5mm)、 $2\phi$  (0.25mm)、 $3\phi$  (0.125mm)、 $4\phi$  (0.0063mm) の篩を用いて湿式篩分けを行い、乾燥した後秤量した。なお、試料の乾燥重量中における粒径4 $\phi$ 以上の砂粒分の重量%を含砂率とした。 $2\phi$ 残渣は、実体顕微鏡を用いて、テフラ粒子の特徴について観察・記載した。

3 φ残渣について、重液(テトラブロモエタン、比重2.96)を用いて重鉱物と軽鉱物に分離し、乾燥後秤量した。軽鉱物および重鉱物は、水浸プレパラートを作製し、偏光顕微鏡下で鉱物粒子を同定・計数した。なお、重鉱物は、単斜輝石、斜方輝石、角閃石、磁鉄鉱、不明粒子に分類した。また、軽鉱物は、雲母類、石英、長石類、火山ガラスに分類し、火山ガラスは町田・新井(2003)の分類基準(平板状(b1)、Y字状(b2)、繊維状(p1)、スポンジ状(p2)、破砕型(o0))に従って分類した。なお、ガラスは電子顕微鏡で観察し、写真を撮影した。

#### b. 火山ガラスの屈折率測定

火山ガラスの屈折率については、横山卓雄ほか(1986)に従い、温度変化型屈折率測定装置を用いて屈折率(n)を測定し、範囲(range)と平均(mean)を示した。

#### (3) 結果

# a. テフラの特徴と火山ガラス屈折率および同定結果

以下に、採取されたテフラ試料の肉眼および実体顕微鏡による特徴、テフラ分析による鉱物組成および火山ガラスの屈折率測定結果を述べる。

試料は、軽石混じり黒褐色砂質粘土(10YR 3/2)である。粗粒物(2o篩の残渣)の実体顕微鏡

# 表 2 テフラ試料の篩分け結果

試料No.	乾燥重量	含 砂 率	砂	粒分の粒度	組成(重量	g)	砂粒分の粒度組成(重量%)				
瓦八个十NO.	(g)	(重量%)	1 φ	2 φ	3 φ	4 φ	1 φ	2 φ	3 φ	4 φ	
1	23.47	11.30	0.40	3.80	5.80	1.30	3.54	33.63	51.33	11.50	

観察では、白色の軽石からなる(図版1-1)。粒度組成は、2のおよび3の粒子が全体の約80%を占める(表 2)。なお、軽石の最大粒径は1.5mm前後である。3の粒子の鉱物組成は、軽鉱物ではガラスが付着した長石が多く、火山ガラスは軽石型のスポンジ状ガラスが多く、繊維状ガラスを少量含む(図表 3、図 1、版 $1-2\sim4$ )。重鉱物ではガラスが付着した斜方輝石や磁鉄鉱が多く、単斜輝石を含む(表3、図 1、図版 $1-5\sim6$ )。軽石型ガラスの屈折率測定では、範囲1.5006-1.5053、平均1.5030であった(図 2)。このテフラは、鉱物組成および火山ガラスの特徴あるいは屈折率測定結果から、駒ケ岳 C2テフラ(Ko -C2)と同定される。

表3 テフラ層(3 φ粒子)の軽鉱物および重鉱物組成

		軽鉱物 (粒数)											重鉱物(粒数)						
試料No.	雲母類	石英	長石類			火山:	ガラス			<b>太</b> 阳	ادک	単斜輝石	斜方輝石	角閃石	磁鉄鉱	カンラン石	不明	스라	
		口央	又口知	平板状	Y字状	繊維状	スポンジ状	破砕型	合計	小明	口印							口前	
1			163				17			20	200	42	95		62		1	200	



図1 各テフラの含砂率・粒度組成・鉱物組成、火山ガラス分布図

駒ケ岳C2テフラ(Ko-C2)は、AD1694年に駒ケ岳火山から噴出した降下軽石および火砕流堆積物である。火山灰は東北東方向に350km以上に及ぶ。軽石中の主な鉱物は、単斜輝石と斜方輝石である。

火山ガラスの屈折率 (n) は、軽石型ガラスにおいて1.501-1.505、斜方輝石の屈折率  $(\gamma)$  は1.709-1.713である(町田・新井、2003)。

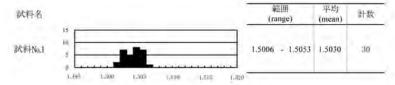


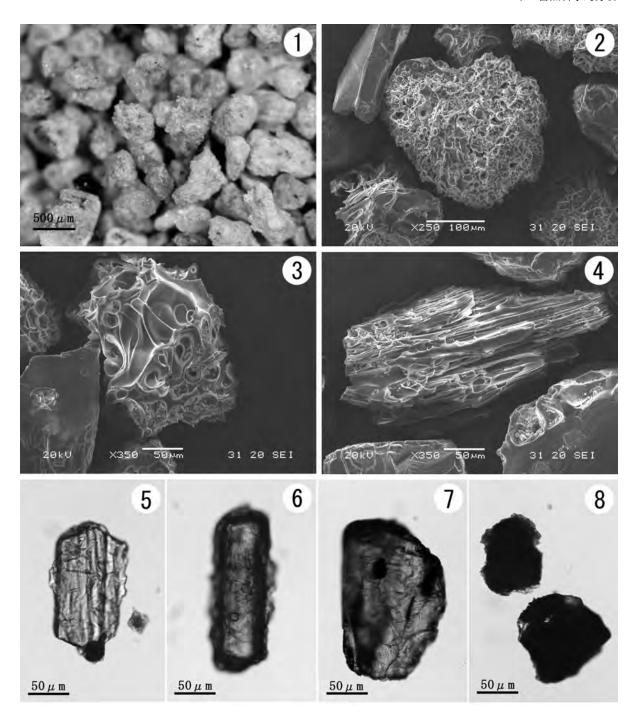
図2 各テフラ中の軽石型ガラスの屈折率測定結果

#### (4) おわりに

自然流路の土層14(基本層序II-2層)から採取されたテフラ層について、鉱物組成および火山ガラスの屈折率測定を行った。その結果、駒ケ岳C2テフラ(Ko-C2)と同定された。

# 引用文献

町田 洋・新井房夫 (2003) 新編 火山灰アトラス. 336p, 東京大学出版会 横山卓雄・檀原 徹・山下 透 (1986) 温度変化型屈折率測定装置による火山ガラスの屈折率測定. 第 四紀研究, 25,21-30.



図版1 テフラ試料の顕微鏡写真(1: 実体顕微鏡, 2-4: 電子顕微鏡, 5-8: 偏光顕微鏡) 1.2 φ 残渣の 2-3.3 φ 軽石型スポンジ状ガラス 4.3 φ 軽石型繊維状ガラス 5-6.3 φ ガラス付着斜方輝石 7. 単斜輝石 8. ガラス付着磁鉄鉱

#### (1) はじめに

館城跡において行われた平成21年度発掘調査で、明治期以降の人為的な堆積層の下位に認められた自然堆積層より土壌試料が採取された。以下にこの土壌試料を用いて行った花粉分析の結果を示し、遺跡周辺の古植生について検討した。

# (2) 試料と分析方法

試料は2-2調査区の自然堆積層(基本層序 $\Pi-1$ 層に相当)より採取された2試料(No.1, No.2)である(図 1)。各試料について、No.1(12層)はやや土壌化が進んだ黒色土壌で、直上の $2\sim1$ 1層は明治期以降に農地造成のために流路を埋め戻した人為的な堆積層である。No.2(13層)はやや泥炭質の黒色土壌で、細かな根状の植物遺体が散在しており、砂も少し認められる。本層直下の14層は火山灰層で、火山灰分析の結果、1694年に噴出した駒ケ岳c2テフラと同定されている(火山灰分析の節参照)。花粉分析はこれら2試料について以下のような手順に従って行った。

試料(湿重約5g)を遠沈管にとり、10%の水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後、0.5mm目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46%のフッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、比重分離(比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離)を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理(無水酢酸9:1濃硫酸の割合の混酸を加え3分間湯煎)を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作製して行い、その際サフラニンにて染色を施した。

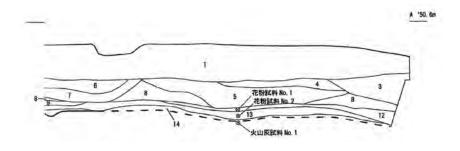


図1 試料採取地点付近の土層断面と試料採取層準

# (3) 分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は樹木花粉29、草本花粉27、形態分類を含むシダ植物胞子4の総計60である。これら花粉・シダ植物胞子の一覧を表1に、それらの分布を図2に示した。なお分布図の樹木花粉は樹木花粉総数を、草本花粉・シダ植物胞子は全花粉胞子総数を基数とした百分率で示してある。また図や表においてハイフン(一)で結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示しており、クワ科・バラ科・マメ科の花粉には樹木起源と草本起源のものとがあるが、各々に分けることが困難なため便宜的に草本花粉に一括して入れてある。

検境の結果、樹木花粉ではコナラ属コナラ亜属が最も多く検出され、出現率は20~30%を示している。次いでブナ属が多く、No.2では20%に達している。また、同試料においてマツ属複維管束亜

属(アカマツ、クロマツなどのいわゆるニョウマツ類)とカバノキ属が10%を越えて検出されており、その他、スギ、クマシデ属-アサダ属、ハンノキ属、ニレ属-ケヤキ属、カエデ属、トチノキ属、ウコギ科などが5%前後の出現率を示している。草本類の占める割合は高く、No.2では約64%を占めている。その中ではイネ科が最も多く、No.2では30%を越えている。次いでヨモギ属が多く、20%弱の出現率を示している。その他、ソバ属が少ないながら2試料で観察されており、好水性のミズバショウ属やツリフネソウ属、アカバナ属、道端雑草のオオバコ属などが検出されている。

#### (4) 遺跡周辺の古植生

試料の時期は、駒ケ岳c2テフラが噴出した1694年から明治期の期間と考えられる。この時期の館城跡2-2調査区には流路が存在しており、水辺やその周辺にミズバショウ属やガマ属、ツリフネソウ属、アカバナ属などが生育していたとみられる。また、その土手部にはイネ科、ヨモギ属、カヤツリグサ科、アカザ科、ヒユ科、ツユクサ属、ギシギシ属、イタドリ節などの雑草類が群落を形成していたと推測される。さらに、ハンノキ属、ヤナギ属、クルミ属、ウコギ科などの樹木類も土手の一部地域に生育していたとみられる。この流路の周辺においてソバ畑の存在も推測され、道端雑草のオオバコ属などが畑周辺に生育していたとみられる。一方、遺跡周辺丘陵部にはコナラ亜属を中心にクマシデ属ーアサダ属、カバノキ属、ブナ属、ニレ属ーケヤキ属などが生育する落葉広葉樹林が成立していたと推測される。またスギ、トチノキ属、シナノキ属などが丘陵の斜面部を中心に生育していたとみられる。さらにニヨウマツ類の二次林も一部地域に成立していたと推測される。

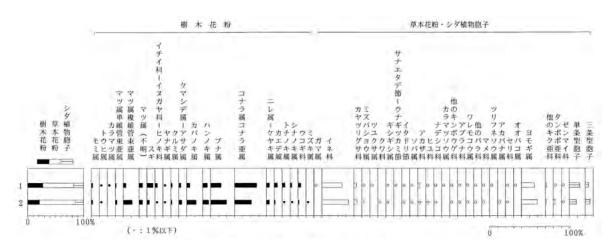
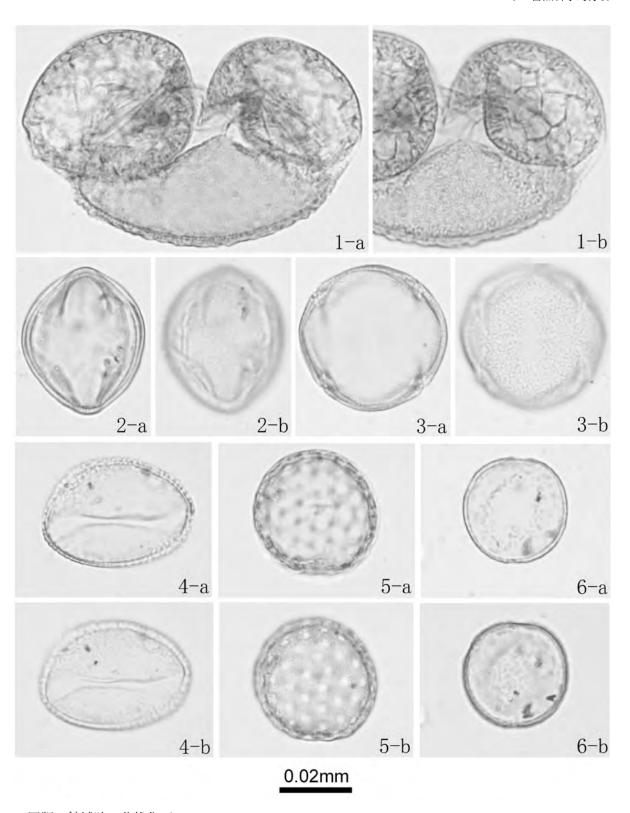


図 2 館城跡 2 - 2調査区の花粉化石分布図 (樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した)

## 表 1 産出花粉化石一覧表

和名	学名	1	
樹木			
モミ属	Abies	4	- 3
トウヒ属	Picea	2	
カラマツ属	Larix	1	2
マツ属単維管東亜属	Pinus subgen. Haploxylon	3	- 3
マツ属複維管東亜属	Pinus subgen. Diploxylon	8	2
マツ属 (不明)	Pinus (Unknown)	10	1
X + 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1	Cryptomeria japonica D. Don	17	
イチイ科ーイヌガヤ科ーヒノキ科	T C. Salix	7	
ヤナギ属ヤマモモ属	Myrica	1	
クルミ属	Juglans	4	
クマシテ属ーアサダ属	Carpinus - Ostrya	6	
ハシバミ属	Corylus	1	
カバノキ属	Betula	9	2
ハンノキ属	Alnus	13	1
ブナ属	Fagus	29	4
コナラ属コナラ亜属	Quercus subgen. Lepidobalanus	62	4
ニレ属ーケヤキ属	Ulmus - Zelkova	9	
キハダ属	Phellodendron	1	
ユズリハ属	Daphniphy11um	1	
ニシキギ科	Celastraceae	9	
カエデ属	Acer	8	
トチノキ属	Aesculus Tilia	5	
シナノキ属 マタタピ属近似種	cf. Actinidia	1	
ウコギ科	Araliaceae	8	
ミズキ属	Cornus		
イボタノキ属	Ligustrum	-	
ガマズミ属	Viburnum	1	
草本	~		
ガマ属	Typha	202	35
イネ科 カヤツリグサ科	Gramineae Cyperaceae	26	4
ミズバショウ属	Lysichiton	5	,
ツユクサ属	Commelina	3	
クワ科	Moraceae	-	
ギシギシ属	Rumex	7	
サナエタデ節ーウナギツカミ節	Polygonum sect, Persicaria-Echinocaulon	1	
イタドリ節	Polygonum sect. Reynoutria	3	
ソバ属	Fagopyrum	1	
アカザ科	Chenopodiaceae	19	
ヒユ科	Amaranthaceae	5	
ナデシコ科	Caryophyllaceae	1	
カラマツソウ属	Thalictrum	1	
他のキンポウゲ科	other Ranunculaceae	4	
アプラナ科 ワレモコウ属	Cruciferae	1	
	Sanguisorba other Rosaceae	1	
	Other Rosaceae		
他のバラ科	Leguminosae	7	
他のバラ科 マメ科	Leguminosae Impatiens	7 2	
他のバラ科 マメ科 ツリフネソウ属	Impatiens	2	
他のバラ科 マメ科 ツリフネソウ属 アカバナ属	Impatiens Epilobium	2	
他のバラ科 マメ科 ツリフネソウ属	Impatiens	2	1
他のバラ科 マメ科 ツリフネソウ属 アカバナ属 セリ科	Impatiens Epilobium Umbelliferae	6 4	
他のバラ科 マメ科 ツリフネソウ属 アカリボナ属 セオオバコ属 マルニンジン属 ヨモギ属	Impatiens Epilobium Umbelliferae Plantago Codonopsis Artemisia	2 6 4 - 130	21
他のバラ科 マメリカスシー アカバナ属 アカバナ属 マリカバナス スター マリカバス スター マリカバス スター マリカバス スター スター スター スター スター スター スター スター スター スタ	Impatiens Epilobium Umbelliferae Plantago Codonopsis Artemisia other Tubuliflorae	2 6 4 - 130 10	21
他のバラ科 マメ科 ツリフネソウ属 アカバナ属 セオイバコ属 ツルニンジン属 ヨモギ属	Impatiens Epilobium Umbelliferae Plantago Codonopsis Artemisia	2 6 4 - 130	21
他のバラ科 マメリカネソウ属 アカスト属 セオバフナ属 セオバニンジ コモン エボ カルモギ属 他のナポポ タンが シを植物	Impatiens Epilobium Umbelliferae Plantago Codonopsis Artemisia other Tubuliflorae Liguliflorae	2 6 4 - 130 10	21 1 2
他のバラ科 マツカバナ スリウ属 アカリス・属 セオバス・属 セオルニンジ カルニン属 カルモギのボボ サンドを カンボポー シンを も物 シント カンティア シント カンド カンド カンド カンド カンド カンド カンド カンド カンド カンド	Impatiens Epilobium Umbelliferae Plantago Codonopsis Artemisia other Tubuliflorae Liguliflorae  Lycopodium	2 6 4 - 130 10	21
他のバラ科 マツカ科 マツカバナ スト スト スト スト スト スト スト スト スト スト スト スト スト	Impatiens Epilobium Umbelliferae Plantago Codonopsis Artemisia other Tubuliflorae Liguliflorae  Lycopodium Osmundaceae	2 -6 4 - 130 10 5	21
他のバ科フ科マッカスチ属 マッカバチスリウ属 アカリス・ス エカリス・ス スカース・ス スカース スカー	Impatiens Epilobium Umbelliferae Plantago Codonopsis Artemisia other Tubuliflorae Liguliflorae  Lycopodium	2 6 4 - 130 10 5	21
他マッカ科 マッカス・ 「	Impatiens Epilobium Umbelliferae Plantago Codonopsis Artemisia other Tubuliflorae Liguliflorae  Lycopodium Osmundaceae Monolete spore Trilete spore Arboreal pollen	2 - 6 4 - 130 10 5 - 4 105 31 221	21 22 22 22 22 22 22 22 22 22 22 22 22 2
他マッカ科 のメリカバ科 フィバ科 フィバ科 フィバ ス・ のメリカバ ス・ のメリカバ ス・ のメリカバ ス・ のメリカバ ス・ のメーク ス・ のメーク 、	Impatiens Epilobium Umbelliferae Plantago Codonopsis Artemisia other Tubuliflorae Liguliflorae Liguliflorae  Lycopodium Osmundaceae Monolete spore Trilete spore Arboreal pollen Nonarboreal pollen	2 - 6 4 - 130 10 5 - 4 105 31 221 446	211 1 2 2 2 2 2 2 6 7
他マッアセオッコ (Manager Parager Pa	Impatiens Epilobium Umbelliferae Plantago Codonopsis Artemisia other Tubuliflorae Liguliflorae  Lycopodium Osmundaceae Monolete spore Trilete spore Arboreal pollen Spores	2 -6 4 -130 10 5 -4 105 31 -221 446 140	211 122 2267 1567
他マッアセオッコ M M M M M M M M M M M M M M M M M M M	Impatiens Epilobium Umbelliferae Plantago Codonopsis Artemisia other Tubuliflorae Liguliflorae Liguliflorae  Lycopodium Osmundaceae Monolete spore Trilete spore Arboreal pollen Nonarboreal pollen	2 - 6 4 - 130 10 5 - 4 105 31 221 446	211 122 2267 1567

T. - C. はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupresaceaeを示す



### 図版 館城跡の花粉化石

1:マツ属複維管東亜属 PLC.SS 4974 No.1 4:ミズバショウ属 PLC.SS 4976 No.1

2:バラ科 PLC.SS 4972 No.1 5:アカザ科 PLC.SS 4971 No.1

3: ギシギシ属 PLC.SS 4975 No.1 6:オオバコ属 PLC.SS 4973 No.1

# VI章 調査のまとめ

#### 1. 史跡外西側の堀・柵列(第1調査区の成果)

平成18年度の調査の結果、館城跡西辺の堀は西へ方位を変え、史跡外へ延びることが明らかになった。今年度は、史跡外西側、町道「上館城ノ岱線」西側の農地に調査区を設定し、史跡外へ延びる堀・柵列の検出を行った。

調査の結果、堀・柵列を検出することができなかった。このことから、館城跡西辺の堀・柵列は町道「上館城ノ岱線」道路敷地内で屈曲し、町道敷地内を町道と並行して北へ延びるものと推測する。

町道に沿って設定したサブトレンチ3~5では町道拡幅以前の旧用水路を検出した。底面に重機の 爪痕が残っていることから、戦後に掘削が行われたことは明らかであるが、館城跡の堀が踏襲された 可能性も残る。今後の調査によって検証する必要がある。

#### 2. 北辺の堀・柵列の所在(第2調査区の成果)

館城跡史跡内北側を流れる用水路が、館城築城時には自然の流路として何らかの区画の機能を果たしていた可能性を検証するために、流路の規模や形状の確認、流路周辺の遺構検出を目的として、2 箇所の調査区を設定した。

2-1調査区、2-2調査区ともに遺構を検出することはできず、流路と館城との関係を積極的に裏付ける証拠は確認できない。

町道「上館城ノ岱線」東側に隣接する2-1調査区では、流路は調査区中央で入江状に広がり、低湿地を形成する。重機を使用した埋立が行われており、戦後、農地開発等に伴って、低湿地が埋め戻され、現在の景観が形成されたものである。

第3調査区に隣接する2-2調査区でも同様に流路を検出した。2-1調査区と同様、埋立が行われており、本来は幅 $6\sim8$  mの自然の流路である。人為堆積層除去後の流路底面は現地表面から約0.7 mでほぼ平らな断面となることから、当時の水流はそれほど強くなかったと推測でき、2-1調査区同様、湿地状の景観だったようである。

駒ケ岳C2火山灰と同定された(V章第1節参照)火山灰層より上位2層の自然堆積層(図17土層 12~13)から採取した土壌試料を用いて花粉分析を行った(V章第2節参照)。試料採取土層は、駒ケ岳C2火山灰降灰年代の1694年から流路埋立以前に形成された堆積層であることから、館城築城時の生活面が含まれる。

花粉分析の結果、土層12、13採取試料はいずれもコナラ属コナラ亜属が最も多く、次いでブナ属が多く検出され、「遺跡周辺丘陵部にはコナラ亜属を中心にクマシデ属-アサダ属、カバノキ属、ブナ属、ニレ属-ケヤキ属などが生育する落葉広葉樹林が成立していた」(V章第2節)と推測される。平成18年度調査の西辺の堀底採取試料、平成20年度調査の北東部の堀底採取試料においても類似する分析結果が確認されている。

また、平成20年度に引き続きソバ属が検出されことから、「流路の周辺においてそば畑の存在も推測され」る。今後、年代を特定できる試料の採取を試み、館城築城時の栽培植物の有無を明らかにしたい。

#### 3. 北東部の柵列、整地層(第3調査区の結果)

平成20年度調査において検出された柵列の延長及び、整地層の範囲を確認するために、平成20年 度調査区に隣接して調査区を設定した。

平成20年度調査区検出の柵列の西側延長上で確認した「溝状遺構」は、柱痕が確認できないことから現時点で柵列とは断定できないが、整地層の北縁に並行すること、平成20年度柵列の延長上に精確に位置することから、何らかの区画施設の痕跡と判断する。

整地層は西側を2-2調査区へ続く水路と沢状地形によって西側と北側を遮断され、これらとの比高差を活かして平坦面を構築したものである。平成20年度の調査では焼土層、炭化米が検出されたが、今年度の調査では小規模な焼土が検出されたのみである。

平成20年度調査区と同様、柱穴や礎石、礎石の抜き取り痕などは検出できなかったことから、少なくとも調査区内においては、建物の構築が行われなかったと結論付ける。

調査区域周辺は「米倉跡」と地域住民によって呼称されており、調査によって炭化米や焼土層、釘など建物の存在をうかがわせる痕跡や遺物の出土があったが、これらは、別の場所にあった建物の部材や収納物を「火事場整理」的に調査区周辺へ廃棄した結果であった可能性が高まった。後述する第5調査区礎石建物跡の位置づけと併せて調査区周辺空間の機能を推測していきたい。

#### 4. 南西部の堀・土塁・柵列(第4調査区の成果)

平成20年度及び21年度調査の成果をあわせて報告した。

堀・土塁・柵列が最も良好に残存する箇所を選定し、館城跡外郭線の構造を確認した。調査区域は 館城跡南西部で、堀・土塁がクランク状に屈曲する箇所で、柵列は堀の内側を真芯距離で約4mのと ころを堀・土塁と並行して位置することが確認できた。

平成21年度調査区の堀・土塁・柵列が城内側に屈曲する箇所では、柵列埋土上位を土塁構築土が覆う状況が確認できた。柵列柱痕が土塁構築土上面で確認できたことから、柵列構築後に、柵列基部が土塁構築土で埋められたものである。土塁構築後の崩落によるものか、土塁構築時に行われたものなのかは判断できなかった。いずれにせよ、土塁と柵列の間は極めて近距離であったことを示すものである。

平成20年度調査区で検出された柵列柱痕の木材2点を樹種同定したところ、ニレ属とカエデ属と同定された。樹種同定の成果についてはすでに報告したところであるが(厚沢部町教育委員会2009)、平成20年度北東部の調査区で検出された柵列柱痕の木材がニレ属であり、昭和63年度調査出土の柵列柱痕が「ナラ、セン」と鑑定されていることから、館城跡の柵列に用いられた部材の樹種は一定ではなく、また、広葉樹が主体的に使用された可能性がある。

#### 5. 礎石建物跡(第5調査区の成果)

#### (1)「米倉建物」

第5調査区で検出された礎石建物は大きく2群に分けられ、北に位置する「米倉建物」と南に位置する「本丸建物」がある。「本丸建物」は、さらに「本丸建物1」、「本丸建物2」の2棟の建物とした。

「米倉建物」は、桁行13間、梁行5間の建物で、南面と東面に半間の張り出しが付く。中央通路の左右に部屋が配置される構造である。北海道大学附属図書館所蔵の『藤枝家文書』「館城略図」には「五間 十五間 米倉」の注記のある建物と、「二十間 十間 賄部屋」の注記のある建物が描かれる。この中で「米倉」とされる建物が、検出された「米倉建物」の規模に最も近い。

出土遺物をみると、食膳具を中心とした陶磁器類が多く出土しており、その内容は「本丸建物」出土の陶磁器類と大きな差がないことから、本建物の性格については今後の検討課題である。

#### (2)「本丸建物」

「本丸建物1」と「本丸建物2」からなり、特に「本丸建物1」は『増田家文書』「館築城圖」とよく一致する。「館築城圖」については、原本は所在不明で、厚沢部町教育委員会の所有する写本が現在確認できる唯一の写本である。

「館築城圖」では「本丸建物 1 」と「本丸建物 2 」に相当する建物が一棟の建物として描かれており、「本丸建物 1 」と「本丸建物 2 」間の礎石確認調査を念入りに行ったが、礎石や礎石の抜き取りの痕跡も確認できなかったことから、 2 棟の建物と判断した。

「本丸建物 2」については礎石の検出が不十分で、建物を復元するに至っていない。

採集遺物の大半は「本丸建物1」からである。「館築城圖」では「本丸建物1」に相当する建物が城主とその家族の生活空間である「奥御殿」、その西側につながる「本丸建物2」に相当する建物が、城主の日中の居所である「常御殿」と推測できることから、より内向きの日常的空間である「本丸建物1」から多くの遺物が採取できたことは「館築城圖」の記載とも整合性がある。

今回の調査では、地表面で確認できた礎石のみを報告対象としており、報告以外にも礎石が抜き取られ、根石のみが残存していた箇所などについては礎石配置に含めていない。今年度の調査によって 改めて調査対象区域では大規模な削平が行われていないことが確認できた。

# 参考文献

#### <引用文献>

#### Ⅱ章

厚沢部町史編纂委員会 1969『櫻鳥-厚沢部町の歩み-』

江差町史編集室 1979『江差町史』第三巻史料三 江差町

江差町史編集室 1981『江差町史』第四巻史料四(関川家文書) 江差町

江差町史編集室 1983『江差町史』第六巻通説二 江差町

菊池明 1998『南柯紀行・北国戦争概略衝鉾隊之記』新人物往来社

工業技術院地質調査所 1975 『地域地質研究報告 館地域の地質』

永田富智 1991「北門史綱(前承-巻之四より巻之七)」『松前藩と松前-松前町史研究紀要-』松 前町史編集室

北海道開発庁 1970『5万分の1地質図幅説明書 江差』

#### IV章

北海道教育委員会 1964『文化財調査概要報告書』

大場利夫 1969「北海道檜山郡厚沢部城址」『日本考古学年報17(昭和39年度)』日本考古学協会

#### V章

\*章末に記載

#### <その他の参考文献>

厚沢部町教育委員会・十勝考古学研究所 1989『館城趾 遺構確認調査報告書』

厚沢部町教育委員会 1991『館城址遺構・範囲確認調査-第2・3次調査報告書-』

厚沢部町教育委員会 1991『館城址 遺構・範囲確認調査=第2,3次発掘調査報告書=』

厚沢部町教育委員会 2007『館城跡Ⅲ 平成17·18年度町内遺跡発掘調査事業に伴う発掘調査報告書』 厚沢部町教育委員会 2008『館城跡Ⅳ 平成19年度町内遺跡発掘調査事業に伴う発掘調査報告書』 厚沢部町教育委員会 2009『館城跡V 平成20年度町内遺跡発掘調査事業に伴う発掘調査報告書』

大橋康二 1993『肥前陶磁』考古学ライブラリー55 ニュー・サイエンス社

大橋康二 1994『古伊万里の文様』理工学社

大橋康二 2004『世界をリードした磁器窯 肥前窯』シリーズ「遺跡を学ぶ」005 新泉社

九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年-九州近世陶磁学会10周年記念誌-』

九州近世陶磁学会 2009『江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通(関東・東北・北海道編)』 第19回九州近世当時学会資料

財団法人 瀬戸市埋蔵文化財センター 2002 『財団法人 瀬戸市埋蔵文化財センター企画展図録 江戸時代の瀬戸窯』

財団法人 瀬戸市埋蔵文化財センター 2004『財団法人 瀬戸市埋蔵文化財センター企画展図録 江戸時代の瀬戸・美濃窯』

函館市教育委員会 2006 『特別史跡五稜郭跡箱館奉行所跡発掘調査報告書』

波佐見町教育委員会 1993 『波佐見町内古窯跡群調査報告書』波佐見町文化財調査報告書第4集 波佐見町教育委員会 2006 『大新登窯跡』波佐見町文化財調査報告書第17集

財団法人北海道埋蔵文化財センター 1984『史跡松前藩戸切地陣屋跡 - 昭和58年度発掘調査概要報告 - 』上磯町教育委員会

北海道文化財保護協会 1985『史跡松前藩戸切地陣屋跡-昭和59年度発掘調査概要報告-』上磯町 教育委員会

北海道文化財保護協会 1986『史跡松前藩戸切地陣屋跡-昭和60年度発掘調査概要報告-』上磯町 教育委員会

松前町教育委員会 2005『東山遺跡』

写真図版 1

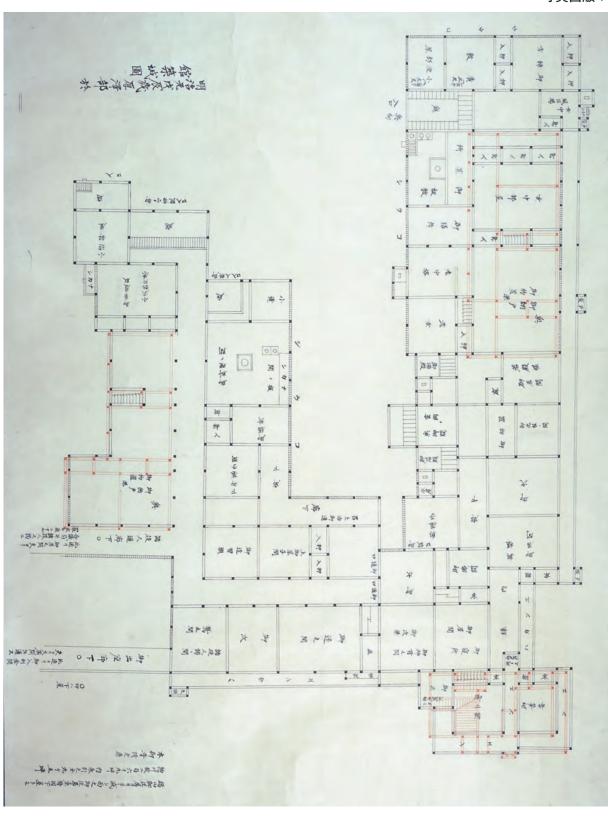


写真 1 『増田家文書』「館築城圖」(厚沢部町郷土資料館所蔵)



写真2 第1調査区全景(南から)



写真3 第1調査区サブトレンチ1堀断面(東から)



写真4 第1調査区サブトレンチ5(南西から)



写真 5 第1調査区サブトレンチ5堀断面旧用水路検出(南から)



写真6 2-1調査区全景(東から)



写真7 2-1調査区全景(西から)



写真8 2-2調査区全景(南東から)



写真9 2-2調査区西壁断面(南東から)



写真10 第3調査区全景(南から)



写真11 第3調査区「沢状地形」(東から)



写真12 第3調査区溝状遺構断面(東から)



写真13 平成20年度第4調査区堀・土塁・水路(西から)

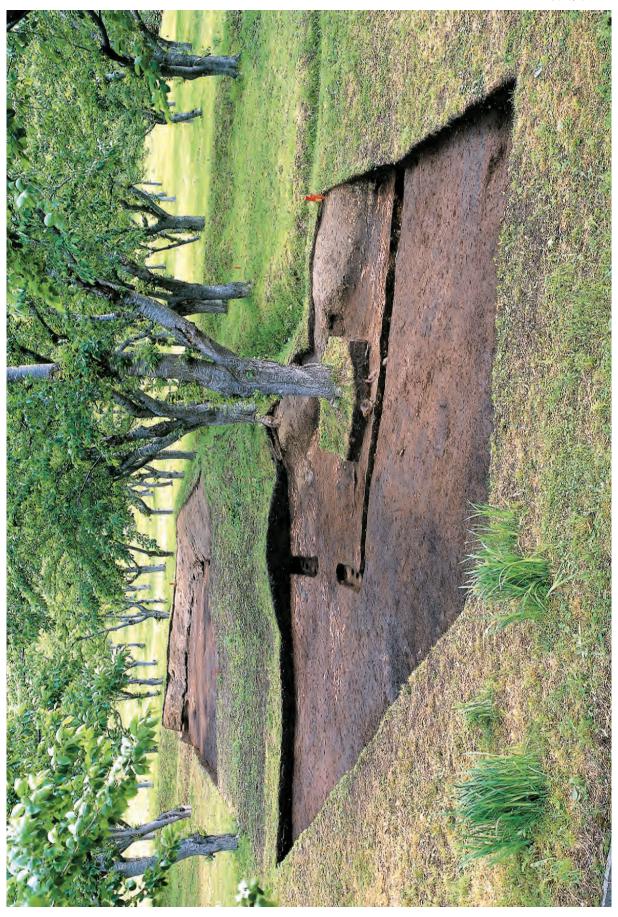


写真14 平成21年度第4調査区全景(北から)

写真図版10

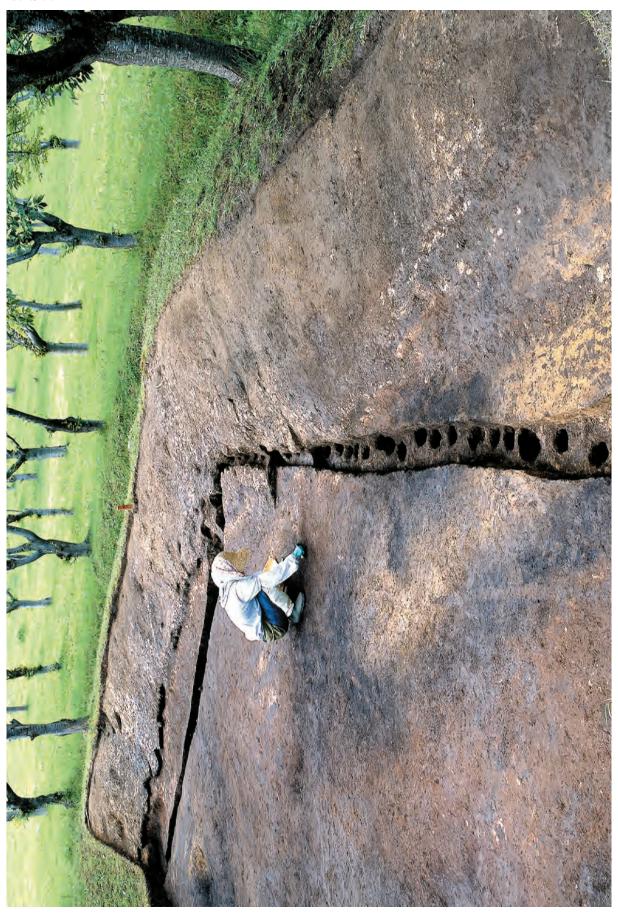


写真15 平成21年度第4調査区南側柵列検出状況(北から)



写真16 平成21年度第4調査区堀・土塁・柵列屈曲部(東から)



写真17 平成20年度第4調査区柵列柱痕断面(南から)



写真18 平成21年度第4調査区柵列断面(南東から)



写真19 第5調査区「米倉建物」礎石検出状況(南から)



写真20 第5調査区「本丸建物2」礎石検出状況(南東から)

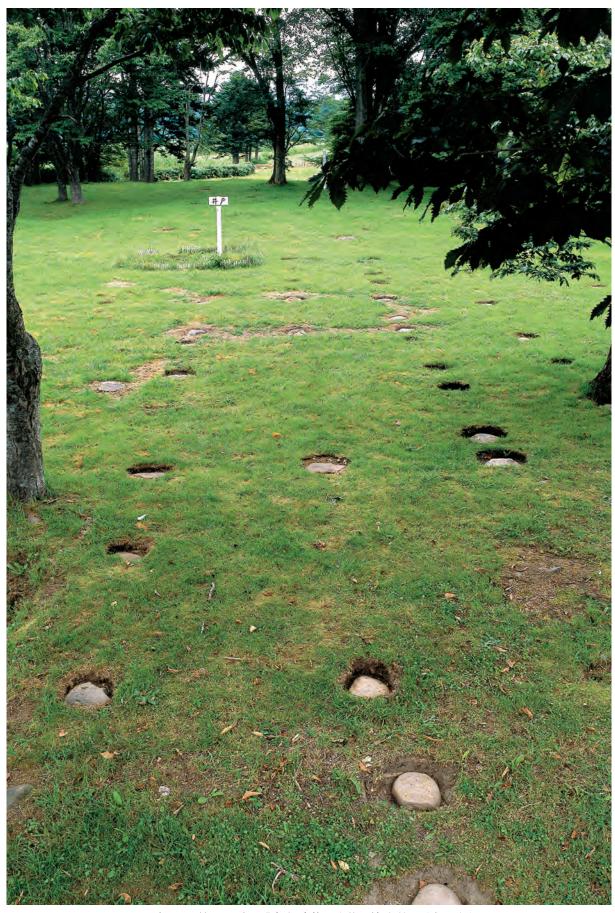


写真21 第5調査区「本丸建物1」礎石検出状況(南から)



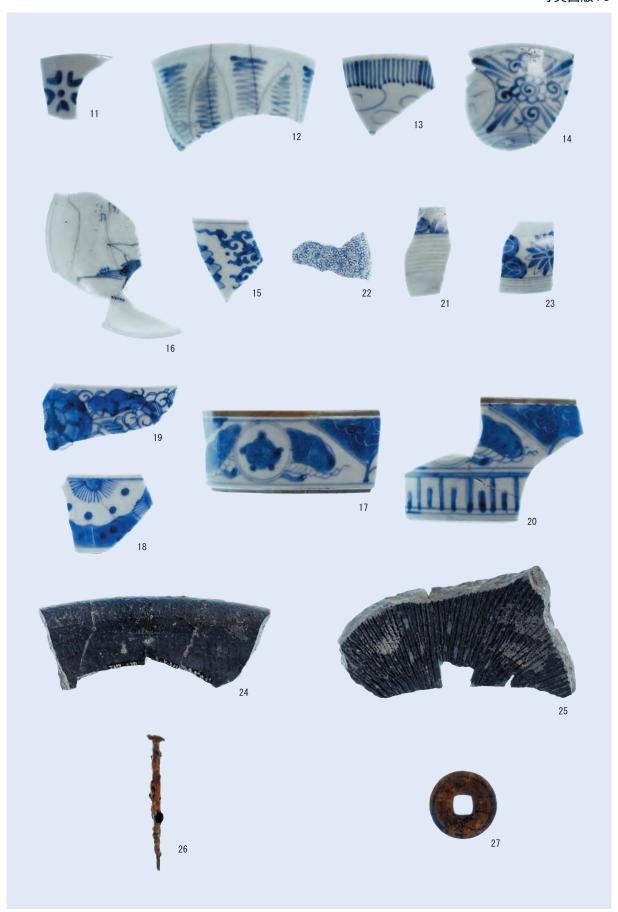


写真25 第5調査区「米倉建物」採集遺物



写真26 第5調査区「本丸建物」採集遺物

# 報告書抄録

ふりがな	しせきまつま	= ラールス	あと ふく	ーーーー わまじ <sub>ト</sub>		 たてじょうあ	ト たてじ	トうあと
								2700
書 名	史跡松前氏坂	成跡 福山 ————	城跡 館場	成跡 館場	战跡VI ————			
副 書 名	平成21年度町	丁内遺跡発	<b><sup>羌</sup>掘調査事</b> 第	美に伴う 発	<b>Ě掘調査</b> 幸	报告書		
シリーズ名	厚沢部町教育	<b>育委員会発</b>	摇調查報告	音				
シリーズ番号	第8集							
編著者名	石井淳平							
編集機関	厚沢部町教育	<b>育委員会</b>						
所 在 地	₹042-1113	北海道	會山郡厚沢	部町新町	234-1			
発行年月日	2010年3月33	1日						
ふりがな所収遺跡	ふりがな 所 在 地	市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
能城跡	はのかい さう ひ etま 北海道檜山 くんあっき ま あ ちょう 郡厚沢部町 きぎ レラ おか 字 城 丘 158 ほか	1363	C-03-14	41° 52′ 36″	140° 20′ 46″	20090511 ~ 20090828	2,317 m <sup>2</sup>	埋蔵文化 財緊急調 査事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺	遺構	主	な遺物	特記	事項
館城跡	城跡	幕末	堀、土塁、柵列、 整地層、礎石		陶磁器、金属製品			

厚沢部町教育委員会発掘調査報告書第8集 史跡松前氏城跡 福山城跡 館城跡 館城跡VI 平成21年度町内遺跡発掘調査事業に伴う発掘調査報告書

平成22(2010)年3月31日

編集・発行 厚沢部町教育委員会

〒043-1113 北海道檜山郡厚沢部町新町234番地の1

TEL (0139) 64-3311 FAX (0139) 64-3822

印 刷 (有)ヨコノ印刷

〒043-0034 北海道檜山郡江差町字中歌町25-1

TEL (0139) 52-0553 FAX (0139) 52-3824